女學雜誌

第二百四十七號
明治二十四年一月十日發兌

本號には先のハワイ國總領事安藤太郎氏か禁酒の説を附錄とし直得意の花客に無代呈上す

禁酒　安藤太郎

下六番町六番地
女學雜誌社

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 247. JANUARY, 10TH. 1891.

第二百四十七號目次

女學雜誌 第二百四十七號
明治二十四年一月十日發兌

社説

一年の經綸

世に忙がはしき人と、閒多き人との二つあり。人間世上に生れ出で、天地山川の間だに秀然として生ひ育つ、生きて何事か爲さずんばある可らず、思ふて此に至り微かに來し方行く末を慮んばかれば、吾れの世に存する偶然ならざるを知る、左らば吾は何事か爲さずんばある可らず、天吾を許し吾が四躰を分解せしめ、靈を永遠の地に招き玉はん日迄は、吾が掌を展らく可らず、吾足伸す可らず、肅々焉として吾が天職を守り行はずんばある可らず、故に心あらん人に閒多きとあるなし、世は常に忙がはしくして、人は絶へず忙がはしくある可き筈のもの也。

然りと雖ども、忙がはしきうちに閑日月を得ると、閑日月あるべき處ろに村雲を狂るはしむるとは、人の覺悟次第に由て其の別あり。夫れ人は晝働きて、夜休まざるを得ず、六日額に汗して、一日安息の歌を朝唱せずんば不可なり。此を以て、人の常に忙がはしきは可し、只だ忙がはしき間だに綽々たる餘地を存し、嚴冬沍寒の空、時として小春のどけき風景を現じ、秋天肅殺の野、たま〳〵紅葉花さくの愛嬌あくんばある可らず。天地間もし此の調合なかつせば、四方漠寂として失せん。エメルソン、人類の爲に歌つて云はく、吾等は微妙なる機關あり、もし之より最と多くの力と、最と多くの樂しみとを併せ出さしめんと欲せば、極めて穩やかに之を取扱はずんばある可らず、生命の炎は酸素のみの間だには余り早く燃え去らんとす、此の故に自然は窒素を混じて太氣を程好くしたりと。

吾人つらつら世の人の爲す所ろを觀るに、彼の怠けもの丶事は暫らく言はず、凡そ働らく所ろの人の中に、常に斷えず世話しがる族と優々閑日月に富める輩との二種類あり。其世話しがるものに至つては、終日寸隙あきに似たり、宛がら立つゝけに走りつゝくるが如く、車の夜と言はず晝と言はず四六時中間斷なく廻りに轉るが如し、而して其の成蹟に付き之を

窺がへば、未だ左したる偉勳を見ず、いつ迄も其人の手を離ちがたきが如く、亦いつ迄も其事の成就したる樣あらず、十年寸暇なく働らきて未だ一事も成らず、忙々然として常に走世場を廻るが如し。之に反し、彼の平素大率ね優々焉たる所ろの人に至ては、近づいて之を見れば日に何事をも爲さゞるが如し、而して遠く之を望めば、年に一大事を落成し、堂々として偉勳を重ね、彼は斷へず計畫すと雖ども、之を忙はし氣に施すとなし、彼の頭らは甚はだ世話しけれども、彼の五躰は沈重として動かず、此故に彼は何をも爲さゞるが如くして常に大ひに成し、何をも思はざるが如くにして極めて大ひに思慮す、其風采に付きて之を言はゞ、優々洋々、鵬鷹の宙天に舞ふが如く、君子の渚に漁どりするが如し。

その斯の如き差別ある所以のものは、經綸畫策の初めに有ると無きとの相違より起る。人の事を成さんとするは、常に弓手が弓を彎くが如くあるべし。上下に觀察し、四方に測量し、躰を恭しうして而して后ち的然正睨し、腕手平らかに直く、右手嚴然として矢を握り、滿引滿張、而して發然として放つ。かくして鵠に當らざるは少なし。もし初めに肅しむことと如此く切ならず、輕乎として立ち、卒然として放ち、矢すでに發するの后ち悔改してヂダンダを踏むと云ふと雖ども不可也、矢を追ふて走り奔ると云ふと雖ども不可也。蓋し事の成ると成らざるとは、大率ね其初に存す、初め善からざるなくんば、能く終の全きとあらざる也。

故に人は事を爲すの初め、先づ深く畫策し、微細に經綸を立つるとを要す。子を産むの難きは産める后の難きにあらず、産前之を案ずるの日尤とも難き也。事業を成さんとするの前、案慮研究の六かしきこと、猶ほ産みの苦しみの如し。念頭無形の理想を結搆し、之を上下四方より攻擊す、如此くば如何に、如此くんば如何に、もし如此くんば如何にと、斯くして其理想誠に倘ほ堅々たるとを確認し、而して后ち之を實際に結搆す、之を以て事業に着手するの日頗ぶる遲し、然れども着手后其成るの日極めて早し。

沈重案慮の人は、事を施すの以前すでに如此く鄭重なり。その如何なる手段を用ひて之を成し、如何なる人物を役使して之を成し、如何なる變事に際して如何なる方法を用ゆべき乎の豫算決然として既に存す。之を以て一旦其の事に當るや、

優々として敢て切迫せず、常に遊ぶが如くして而して其事序を追ふて成功す、所云る忙中閑日月ありとは則ち是の謂ひなり。孔明の趙雲に命ずるや錦嚢の策三つを與ふ、彼四方に困苦し、逃逸の變きはまりなしと雖ども、其事到底策の三つに出でず、孔明は優々として、趙雲は忙々なりと謂つべし。所云る初めに畫策せよと云ふものは即ち之れ也。

一月すでに十日を過ぎし、年頭の休日正に了る、吾等之よりそれ／＼の事業に着手せんとなす。一日の計は其朝にあり、一年の計は其春にあり、吾等來る一ヶ年中の事業を先づ今日に於て畫策せずんばある可らず。明治二十有四年の曆表はすでに現然として備はれり、吾等が生ける曆は果して如何、智慮あるの人、倘彼の柱曆にだも及ばざるとある乎。



言行

○佛と聖人　王陽明の曰く、夫れ佛は外國の聖人なり、聖人は中國の佛なり。西方の佛は釋迦を以て最となし、中國の聖人は堯舜を以て最となす。

○美術　ラスキンの曰く、眞正の美術を創作せんとには、人の手と、頭と、心と、鼎立三行して相伴はずんばある可らず、只だ慰さめの爲に試むると云ふもの丶如きは、未だ美術の眞德を知らず、美術を作らんとするものは更に一層立優りたるもの丶爲めに之を作らざれば不可也。

○鏡　トマス、エ、ケムピスの曰く、汝が心もし正しからば、万物は皆な汝が爲めの明鏡となるべし、汝が爲めの聖き教書となるべし。

○金錢　金錢は人の力の結晶なり、重んぜざる可らず、廉潔の人は余りに之を卑しむ、一方の僻なり、金錢は買賣に用ゆる器なり、買賣するとを得ざる無形のものは之を以て何如ともしがたし、俗人は余りに之を尊とむ、亦一方の僻なり。詩人シエレー曰く、余は金錢を得んとを欲す、何んとなれば能く其用方を知るが故也と。用法尤も重し。

○さびしき哉

さびしき哉、友なき人の心は、冬の荒野に似たり、春は來り梅は笑ふと云ふと雖ども、さびしき人の心は解くに足らず、あゝ天地間もし相愛するものあらずんば、一日の生命といへども永きに堪ゆ可らず、何を以て五十年の長年月に生き存ふるとを得ん。夫れ、人は何のゆえに明日も亦生きんとを欲する乎、他なしその愛する所のものあるが故也、もし愛する所のもの絶て無くんば、一刻も生んとは懶うしとし、暫くも天日を見るに堪ず、速かに息を飲んで自殺せんとを祈るなるべし。左れば、人の生きんとを欲するは其の愛する所ろのものあるが故也、生命は即はち愛あり、而して永遠の生命を受るとは永遠の愛あると是れ也、神は愛あり、神を愛するは即はち永遠の生命を得るに均し。

○天門前の犬

印度の史詩マハブハラタに云く、雄族パンダバスの諸英傑旅行して遂に天の門に達し、將に内に入らんとするとき、番守制して云へらく、公等其伴ふ所ろの犬を去れ、之を率ひて共に天國に入るとを許さずと。英傑は天に入るの榮えを重しとせざるにあらねど、長路の伴隨を離るゝの情に忍びず、泣て曰く、然らば内に入らざるべし、寧ろ犬と共に門外に立んと。天使内に於て之を聽き、感激して躍り出で、公等よし、犬を伴なひて入れと云ひぬ。

○そしり

吾れ世の中を見るに、人は互ひに人を非り、非る人は亦た人に非られ、彼も我も互ひに非りあひて而して一生を送る也。云く、かく〳〵せざれば相濟むまじと、又云く、かく〳〵せざれば義理が立つまじと、局促として其事に屈托し、一生を送る也。あゝ人は非らんが爲に口を持ち、苦勞せんが爲に一身を禀けたるや否や。人は今少し高くありたきもの也。

○世話しき時

世話しき時、用務を辨じて澁滯なからしむるは、用事はサキより〳〵辨じて後に殘さゞるにあり、殘して后にてせんと思ふ時は、其思ひ積もり滯ふりて心苦しく、亦知らざる間に用務の積重なるもの也、サキよりサキより一々着手、前の事終らざれば次の事を執らざるやうに爲すべし、然る時は綽々として常に餘裕あらん、是れ一つの心得あり。

雜録

明治廿三年十一月十日静岡劇場若竹座に於て演説草稿

英雄論

愛山生

金色人種に、破天荒なる國會は、三百議員を以て、其開會を祝さんとて、今や仕度最中なり、私權を確定し、榮譽、財産、自由に向て擔保を與ふべき民法は、漸く完全に歩みつゝあり、交通の女王たる鐵道は何れの津々浦々にも、幾千の旅客を負ふて、殆んど晝夜を休めざる也、日本の文明は眞個に世界を驚殺せりと云べし、三十年前、亞米利加のペルリが、數發の砲聲を以て、江戸城中を混雜せしめたる當時と今日とを並べ見るの利益を有する人々には我文明の勢、猶飛瀑千丈、直下して障礙なきに似たる者あらんか、東西古今文明の急進勇歩、我國の如きもの何處に在る。

嘗て加藤博士が國會猶早しと呼びたるの時代ありき、嘗て文部省は天下に令して四書五經を村庠市學の間に復活せしめんとせし時代もありき、當代の大才子たる櫻痴福地先生が王道論とかいへる漢人にても書きそふなる論文をものせられし時代もありき、ピータア、ゼ、ヘルミット然たる佐田介石師が「ランプ」亡國論や天動説を著して得々乎として我道將さに行はれんとすと唱はれたる時代もありき、丸山作樂君が君主專制の東洋風に隨喜の涙を流されし時代もありき、如此に我日本の學者、老人、慷慨家、政治家、宗教家達は、我文明の餘りに疾歩するを憂へて、幾たびか之を障へんとし、之が堤防を築き、之が柵門を建られつれど、進歩の勢力は之に激して更に勢を増すのみにして、反動の盛なると共に正動も亦盛にして、今や宛然として歐羅巴ナイズされんとせり、勿論輓今稍我人心が少しく内に向ひ、國粹保存の説が歡迎さるゝの現象は見ゆれど、是唯我人民が小兒然たる摸倣時代より進んで批評的の時代に到着したるの吉兆として見るべきものにして、余は之れが爲めに我が文明の歩を止むべしとは思はざるなり。論じて此に到れば、吾人は今文明の急流中に棹して、兩岸の江山、須臾に面目を改むるが如きを覺ふ、過去の事は歴史となりて、卷を捲かれたり、徃事は之れを追論するも益なし、未來の吉凶禍福こそ半は大勢に在り、半は吾人の手に存す

るなれ、我文明を如何にすべき、是吾人の今日に於て解釋すべき問題に非ずや、呉越の人たとひ天涯相隔つるとも、一舟の中に乘ぜば安全なる彼岸に達せしむるまでは、共に力を此に致さゞるべからず、來れ老人よ、青年よ、佛教家よ「クリスチアン」よ其相互の感情に於ては冷かなるも、其宗敵たる位置に於ては相爭ふも、此一事に於ては兄弟であれ、手を携ふるものであれ。

吾人は今文明急流の中に舟を棹しつゝあり、只順風に帆を擧て、自然に其運行に任すべきか、抑も預じめ向て進むべき標的を一定し置くべきか、若し此儘に盲進するも、前程に於て、渦流、暗礁、危岸、險崖なくんば可なり、柔櫓聲中、夢を載せて、淀川を下る旅客を學ぶも差支なしと雖も、若夫れ我文明の中に疾を存し、光れる中に腐敗を藏するを見ば、焉ぞ大聲叱呼して柁師を警醒せざるを得んや。

夫れ物質的の文明は唯物質的の人を生むに足れる而已、我三十年間の進歩は實に非常なる進歩に相違なし、歐米人をして後べに瞠若たらしむる程の進歩に相違なし、然れども余を以て之を見るに、詮し來れば是唯物質的の文明に過ぎず、是を以て其文明の生み出せる健兒も、殘念ながら亦唯物質的の人ある耳、色眼鏡を懸け、「シガレット」を薰らし、「フロック、コート」の威儀堂々たる、敬すべきが如し、然れども是れ銅臭紛々たる人に非ずんば、黄金山を夢むるの兒なり、其中に於て高潔の志を有し、慷慨の氣を保つもの、即ち晨星も啻ならじ、束髮峨々として綠鬖額をつゝみ、能く外國の人と語り、能く「ピアノ」を彈ず、看來れば宛然たる「レディス」なり、然れども其中に存するものは空の空なるのみ、赤間ヶ關の荒村破屋に嘗て野「バラ」の如くに天香を放ちし、烈女阿正の如き、義俠深愛、貞節の如き美德は之を貴き今日の娘子軍に求むべからず、蓋し吾人が之を求め得ざりしは其眼界の狹きが爲ならん、而れども方今の人心は其外界の進歩に殆んど反比例して、其樸茂、忠愛、天眞の如き品格を消磨して、唯物質的の快樂を遂ぐるに、汲々たるは、掩はんとして掩ひ得べからざるの事實に非ずや、思ふて此に至る吾人は賈生ならざるも、未だ嘗て之が爲に長大息せずんばあらず、古來未だ嘗て亡びざるの國あらず、而して其亡ぶるや未だ嘗て其國民が當初の品格を失墜したるに因らずんばあらず噫今に及んで

百尺竿頭、更に一歩を轉ぜずんば、吾人は恐る、「古し我先人が文明を買ひし價は國を亡ふ程に高直なりき」と白晳人種に驅使せれながら我子孫のツブヤカんとを。

夫れ文武の政、布て方策に在りと雖、之を活用するの政治家なくんば空文となりて過ぎんのみ、憲法はスタイン先生をして感服せしむるも、民法は「コード、ナポレオン」に勝ること萬々なるも、國會は開設せらるも、鐵道は網の如くに行渡るとも、之を利用するの政治家、實業家にして、依然たる封建時代の御殿様たり、御用商人たらば憲法も亦た終に何の律ぞ、鐵道も亦終に何の具ぞ、昔し蕃山熊澤氏は曰へり堂宇伽藍の巍々たる今日は即ち是れ佛教衰微の時代也、と宣教師は來りて雲突計りの「チヨルチ」を打建るも、洋々たる「オルガン」の音、肅々たる說教の聲、如何に殊勝に聽ゆるにもせよ、宣教師にリビングストーン氏的の精神を見ると能はず、說教者にパウルノックスの元氣旺せずんば是れ唯規に因て線を畫くのみ、焉ぞ活動飛舞の精神的革命を行ふを得ん、さなきだに御祭主義なる日本人を促して教會を建て、「オルガン」を買ひ、「クワイア」を作るとを惟務むるが如きは是れ莊子の所謂以水止水以火止火ものあり、思ふに日本の今日は器械既に足れり、材料既に備れり、唯之を運轉するの人に乏しきを患ふる耳。

余は信ず、今日に於て我文明をして、有効のものであらしめ、活氣あるものであらしめ、永續するものであらしめんとせば、現時の行掛りなる物質的開化の建造と共に更に高尙なる精神的開化の建造に我步武を向けざるべからずと、更に之を換言すれば、器械備付の業、略々成れるを以て更に之を使用すべき人物養成に向はざるべからずと、蓋し今日の急務實に此一點に存す焉、若し我國をして國會開設の當時に於て慷慨にして而も沈摯なるハンプデンの如きもの一人だにあらしめば吾人は如何に氣强からずや、我商業世界に於て獨立、獨行、良心を事務に發揮する資本家多からしめば、吾人は如何に安心ならずや、我が宗教世界に於て、昔し歐洲に在て震天動地の偉功を奏せし宗教改革諸英雄の如き人傑あらしめば吾人は如何に賴母敷からずや、而して顧みて實際を見るに、政治の世界は壯士を使用する者に蹂躪せられんとし、宗教家は徒らに傳識を衒ふところの柔紳士となり了せんとす、我靈界も、

我物界も、眞俗二跡共に是れ風に吹かるゝ蘆底の人物を以て充されんとす、吾人は之が爲に浩歎を發せざるを得ず、吾人は之か爲に益々人物養成の必要を感ぜざるを得ず」、果して然らば如何にして人物を造り出すべき、是れ吾人が此に至りて論決せざるべからざる問題なりとす（一）世間或は第十九世紀の董仲舒を學んで法律、制度を以て人心の改造を企つる者なきに非ず、然れども法律、制度はたとひ十分其効果を奏するも猶人を驅りて摸型に鑄造するに過ずして、其精神元氣を改造するの用を爲し能ふ者に非ざるは歷史上の斷案なり（二）更に學校敎化の作用を借りて人心改造の途となさんとする者あり、是前法に比すれば固より賢しこき方法なるべしと雖、斯る注入的の敎育を以て人物を作らんとす、吾人其太だ難きを知る、昔し藤森弘庵、藤田東湖に語りて曰く、水藩に於て學校の制を立てしこと尋常一樣の士を作るには足りなん、奇傑の士は此より迹を絕つべしと學校の敎育必しも人物製造の好擔保たらざるなり（三）吾人只一策あり是れ天然の法則なり、是れ歷史上の事實なり、何ぞや、英雄を以て英雄を作るに在るのみ。蓋し觀感興起の理、所謂「インスピレーション」の秘奧は深く人心の裏に潜む、吾人今其如何にして英雄の品格が他の英雄を作り能ふかを辨解せんとする者に非ず、而れども生物が生物を生ずるとが生物界の原則たるが如く、英雄の好摸範が更に他の英雄を造るの一事は疑ふべからざるの事實なり、國家若し英雄漢あらんか、一波萬波を動し、一聲四邊に響くが如く、許多の小英雄は恰も大小の環の如く、中心なる大英雄を取卷きて、一國の人色を造るべし、彼等は斯の如くにして革命を催すべし、國の元氣を恢復すべし、其土地の鹽となるべし、其世の光となるべし、大學に所謂一家仁、一國興仁、もの是也、西鄉南洲氏は、是を以て百二都城の健兒を結び、維新の盛事を成せり、十年の爭亂を惹起せり、新島襄君は是を以て「コンクレゲーショナリスツ」の一派を結び、我日本の精神世界に運動を試みたり、孔夫子は嘗て是を以て、支那の人心を結びたり、今日も猶其殘瑞を保ちつゝあり、國の進動する所以の者、此に存す、國民若し仰ぎて中心とする英雄微つせば、其文明は到底唯物的の魔界に陷らざるを得ず。

故に今日に及んで、我文明の進路を一轉すべきの策、唯國民をして其理想人たるに適ふべき最大純高の英雄を仰がしめて

附録女學

禁酒

安藤太郎

女學雜誌第二百四十七號附錄
明治廿四年一月十日發行
定價四錢

附錄女學

禁酒

安藤太郎

女學雜誌第二百四十七號附錄
明治廿四年一月十日發行
定價四錢

禁酒

安藤太郎

左は安藤太郎君が明治女學校にて、過日男女の青年の集りに對し、演説ありしものを、社員安藤たね子が筆記したるものなり。

今晩私はコチラの學校へ參りましたには、非常の喜びを以て參りました。私は長く外に居り、日本の有樣をよく知りません。殊にハワイに在て、日本との交通が疎く、日本の事に疎く有り升たが、人々からいろ／＼の勸告を受け、其必要を知り、いろ／＼御國の矯風の事業に關係して、心を開き目を明かにしましたが、其内の一が、明治女學校のヿである。私は只學校と云ものは、生徒が寄合ひ、官立學校とか、をもなる福澤さんの學校位丈のヿと思ひましたが、こーゆう婦人を感化薰陶される私立の女學校があり、特に其初は名高き熱心なる婦人に依て成りしヿをきゝ、又此學校の盛んなるヿを承知して、早くからこちらへ出て、教師諸君が教授の有樣、生徒諸君が勉强の有樣を拜見したく思ふて居りましたが、追次身躰が弱くあり、亦折もなし、今迄遺憾に存して居りました。然るに、先達て、嚴本愛兄が私の處へ參られ、此學校に來るヿの御招待があり、其上に又の喜びは、此學校へ皆さんに只御目に懸る計りでなく、婦人に對し、只此社會の婦人でなく、チキストゼチレーシヨンを支配する御婦人に對し、又婦人の方が扱はなければならない私共到底婦人の力をかりなければ力を持つヿの出來ない事業のヿに付て、御談するヿは、まことに喜びます。夫は、禁酒の事で御座り升。私は禁酒の事に付ては、只自分が感じた事、經驗したヿを談す外に、何もありません。尤も其理論に付ては、多くの學者があつて、指を屈するに暇がない。世界の學者がいろ／＼の事を申しますが、私はまだ其事は知らん、只私は經驗があります。自分の經驗に依て禁酒がドーシテ出來る事かと云と、男の力では出來ない事を發明した。之はドーしても、婦人の力でなければならない、此德利や猪

口などを取り去ることが出來ない事を知りました。だによりまして、今晩は理屈や論を云ふのでない、實際のことを申上ます、然るに實際のことと云ふものは耳だちて珍らしきことでありませんから、あなたがた既に御案内であること、極くよくわかりきつた事を、只今晩論より證據と云ふことによつて御談をするので御坐り升。其事は何に付てかと云と、婦人の力の大なることをあなたがたに御談したいと思ふのであります。

今晩こちらに參る事に付て、或る友人が、安藤は明治女學校へ行て禁酒の談をするから、行かないかと云と、ドーモあの人は、自分の禁酒をした自慢を云、そんな自慢談をきゝに行くよりも、自分獨りで勝手に言はして置くが宜しいと云ふ。今一人は、あの男は、時に依ると、女房の自慢談をする、ソーユウことを云て、ドーモ女はえらいと云ふ(ヒヤヒヤ)、殊に女の學校などへ行て、甘いことを云て、ごまをすると、コーユウ人が御坐りますが、併しながら、私は、ごまをする料見もない、本當であります、又私は自分で實に思ひますのみで御坐り升、自慢するでもなければ、ごまをするのでもない、私は誇ると云より、恥をさらすので御坐り升、誇るより、ざんげ談である、決して誇るのでない。併しながら若し誇ると云ふなれば、諸君も酒を止めて、御同樣に誇て頂きたい。夫れから、私の妻のことを吹聽しようと云のでない、酒も飲まず、極く眞面目な人に嫁きし人は、實に幸ひであります。本當に幸ひか知らんが、私の妻は、極不幸なる人であり升た。私は御覽の通り、年寄で御坐り升、最早餘命も澤山御坐りません、此年に成て僅か三年前に酒を禁め、殆んど人間の一生涯、酒を飲んだ樣なもので其内何を得たかと云と、酒を飲むが爲に、學ぶ機會を失ひ、自分の健康を害した。中々私の若い時分には、禁酒位の事でない、酒を飲むことを以て英雄とか、豪傑とか、壯士とか云ふことを誇た時分でありました故、私も英雄豪傑壯士のつもりて、學問は全く怠り、今日取かへしの出來ない樣になりましたも、主として酒の害で御座り升。其外、

未だいろ〳〵ありますが、今晩は、私の歴史談であいから、暫く措き、夫れから私と妻との關係を御談します。何卒御聽き下さい。（謹聽々々）私が酒を飮む爲に、如何程難澁させましたか知らん、今晩此處に御集りの方々は、酒を飮む爲に、連合に難儀を掛ると云ふお方は未だ在るまいと思ひますが、私は酒を飮む爲に、屢々自分で不都合をして、極の事を云と、打たり蹴たりしたことがあるかも知らん、併し其事はないと思ふが、有たかも知れない（大笑）又健康を害し、其他、私は酒を飮んで外を歩行いて居るから、何時迄も搆はずにをりますが、家に待て居る妻君は、如何で御座いましたろう。歸らんうちは待たんければならん、そんなことは何でもないとしても、酒に依てどの位苦勞されたか知れない。だによりまして、どうか止めさせたいと思ふから、酒を飮む時は、二本のものは一本、一本なれは半本にして置けと云ふ。或は外に行く時は、何處に行くと云、彼處へは行くな、こゝへは行くなと、酒の事に付ていよ〳〵意見した。併ながら、私は、其意見は耳にかけん、夫れのみならす、只此酒の一つある爲に、私は自分の妻と樂く暮すとが出來ない。どうもあなたとわたくしは、こうして居るとが實につらいと申しました。つらけれは出て行くが宜しい、なにもつらい人と一處に居るには及んから、お分れしませう。夫れ位の談判は、何でもあい、まだ、温和なる應接だが、もつとひどくなると、嚙みあいましたかもわからん。夫れて、屢自分も攻められ、向ふも私を責め、互に確執を生じ、其内遂に、ハワイへ參ることになりました。ハワイへ參り一年程居りました。一年程居りましたが、やはり不相變、酒は飮んで居て止めません。ハワイは熱い處で、あか〳〵酒を飮むと、身躰にたまらん處ですが、あか〳〵やめん、不相變、飮む。殊に遠慮會釋もなく、成るたけ澤山飮める樣にと、思て居りましたが、處が、日本からハワイへ移住した人の數は三千四五百人も居た。其日本人が、日本を出る時は、餘程勉强して、あちらで金をもうけ、

日本の妻子眷屬へ金を送る積であり、或はあちらに行て、どうぞ何かの商賣にありつかうと云位に、思ふて行きますが、併しながらあつちへ行くと、酒の爲め、ばくちの爲め、或は男女の内の猥りの行狀に依て、御國の外聞にかゝるとばかり致して居りました。私も其事を處分する爲に、説諭をしたり、布告を出したりして、いろ〳〵取締をしたが、どーしても届かない。どーしても仕方がない。一時は、私も日本へ歸ろうとしました。雇主からも苦情が來る、日本からも苦情が來る、領事館の私の机の上に、毎日〳〵一たばねの苦情の書付が來ない事がない、朝から晩迄見てをるも仕方がない、からもー辭職して歸らうと、思ふたとも屢である。いよ〳〵もー國へ歸らうと思ふ時に、サンフランシスコから、美山貫一さんと云ふ人が、キリスト教の事に就て話があるからと云て、ハワイに來られた。私は其信者でもない、又其事を聞たこともないから、更に構ひつけずに居りましたが處が、美山さんが、私の處へ來て、どーも安藤さん、日本人の評判が悪いから、サンフランシスコから態々やつて來たが、どーか一度方々をまわつて勸めをして見たい、日本人の樣子を見たいと思ふから、どーかまわらせ呉れよと云ふとですから、私も實は、此不行狀の取締がつかないに困て居るから、どーでも宜しいようにと云た。其美山さんがぐる〳〵まわり、眞黒になつて歸て來られた。どーも眞黒、夫も道理、泥のなか、塵芥のなか、熱帶地方を歩行きまわつたのですから。夫れから私の前に、手拭に包んだものを出した。何を出ましたろーか。手拭から、さいを三ッ四ッ出し、又コップのかけを出した。そーして其さいは、幾度振ても、てうか、はん斗りの出るさいである。又此のコップはどこの何の誰のものであつた、此爲に、雇主に苦情をかけ、其の爲に他の日本人迄も迷惑する、酒を飲んで仕事を仕ない、夫に依て、いろ〳〵勸めましたが、なかには、ブランデーの徳利を砕して、もう生涯酒を絶たうと云た。又バクチのサイをよこして、此

サイは、誰から五弗とか十弗とかて買たが、も是れから決してばくちを打たんと云ので、よこしたと云て、私に見せられました。私は、領事館の帳面を調べて見ると、其人は實に不思議、始終文句を云た、雇主から苦情を云た領事館の厄介になつた者等である、又サイの方も、其通り。實に不思議、ドーモ、ヤソ教は、不思議なものである、奇躰なものであると云て、美山先生に談したが、美山さんの云には、安藤さん、あなたに願ひたいとがある、どーか、禁酒會を建て頂きたい、若し酒がなければ、今日は三十錢とか二十錢とか其取る金を、家へ持て來て、今度の便の時に、國の妻子眷屬へ送るのであると云て、眞面目につかふ、又女も其通り、不品行をして、女の顔へ泥を塗るヿりでない、日本の顔に泥をぬる樣なとをするとはない。飲むからとろけるのである、ばくちも不行状も何にもかも、皆酒からである。つまり、ハワイの日本人の不品行をなほすには、禁酒會を起すと宜しいから、ドーソ酒を止める事を考て下さいと云た。私は、先づ、夫は至極宜しいから、夫はやつたが宜しかろうと、早受合に云た。私はまだ禁酒會と云ふとを知らん、可笑く思召すでしようが、元と亞米利加などの「テンペランス」と云ふとを聞かんではないが、私は禁酒と云ふとを知らない、酒が止められるものであると思はん。禁酒とは幾日の禁酒か、幾月の禁酒か、酒を禁ずると云ふとが、考のうちにない、生命を捨てるも禁ずるとが出來ないと思ふて居たが、困た事には、美山さんの言ふには、あなたが先になつて立て下さらなければ、到底いけん、外のものが幾ら立てるとも仕方がない、どーかあなたが會頭になつて下さいと云ふとですから、そりやもー携はん、名前を出すなら宜しい、いつでも宜いと、むやみに受合たが、よく聞て見ると、禁酒會に入ると、「禁酒は生涯」「生涯の禁酒だが、禁酒をするにはどーしますか？」「あなたが會長になる」「私は生涯酒を止める！」「あゝとてもいけません、私は迚も出來ません」と云てぐず／＼云てをるうちに、世

話燒の妻君が傍から來て、至極宜しい、僕は贊成ですと云(拍手大笑)ので、けれども、私は贊成と云も其位の事は覺悟であるから、「其様あとは出來ない」。すると不都合の時は不都合のとがあるもので、其時に丁度日本の船が着した、其時の遞信大臣、榎本武揚さんに、御懇意にあつて居り、御ひいきに成て居りましたから、榎本さんから、四斗樽、此位大きい(手眞似)、も一つは郵船會社の森岡さんから來た。其船の船長が、れい〳〵遣つて來て、あなたの處に屆けものがある、榎本さんから酒一樽船長から一樽と云と、傍から例の妻君が、いつでもつきまわり「いけません〳〵、なんです、酒」酒と云と、こんな目をする(まね)。夫れから、今の宣敎師の美山さんもやつて來て、いろ〳〵云ふ、「奥様大變で座います」、「じや、少しづゝ、節酒にしませう、節減しませう」、「あなたいけません、今ま日本の三、四千の人が止めるとか、何とか云てをる時に、少しでも飲んでは、いけません」と云ひます。私は、「どーも、けれども、併しながら、折角送り呉れたもの、大臣から送て呉れしもの、兎に角厚意を」、「いゝへ、厚意もなにもありません酒などを、恩もあんにもないどーも失禮など、國の友、苟くも大臣から(酒などに苟くもをつけて)日本に在る友が、送り呉れしものを」といろ〳〵爭ふ。處が、日本なれば、酒飲連が來て、なに當り前だ位の事を云て、加勢をして呉れませうが、何にを云も、隣りの家には、裁判官で禁酒會の會長ジャッチ君が居る、大きい聲をして、がん〳〵さはぐと、役向にもかゝる「酒飲の安藤」、「ドランカード安藤」などと云はれると、仕方がない、又私も考へた、どーも此二樽をこゝに据へて獨飲んではたまらん、止め様か、飲まうか、飲まうか、止めやうか、止めやうか、飲まうか、と考て居るうちに、暫く外に行きましたが、歸て見ると、皆んな、ニコ〳〵して居る。妻も、美山も、ニコ〳〵して居るから、こりや大夫機嫌が宜から、「能く節酒するから」、「エ、節酒も何にもありやしない、裏へ行て御覽なさい」と。夫れから裏へ

行て見ると、二樽とも、こな〳〵に砕して、（御失望〳〵）、本當に失望して、如何にと云ても、亂暴なと、怒つたが、怒りても仕方がない、錢のとを云じやないが、二樽の代を云と、運賃から何から三十何圓になる、夫れを未練會釋もなく、打砕はすとは、若し日本にでも聞えると惡い、何卒内緒にして置て呉と、わざ〳〵船長の處へ行て頼んだ。然るを殊更御丁寧にも、こちらへ來て、新聞に出した。夫れから仕方がない、こーなつたから、自分も禁酒の積で居ると、二月ヲり立て、新聞紙が來た、これが時事新報でした。夫を見ると、安藤總領事、日本酒を捨つとか、何とか云ふ題で、榎本大臣より送られたる日本酒とか、船長から何々送られたとか、どーとか、こーとか、書いてある。之は、どーも困た談だ、「何です」、「何にも構ふとは有りません」まー無やみです。そうすると、郵便が來た、其郵便は、何と書いてある、上には安藤太郎殿と書いてある、下には、東京婦人矯風會と書いてある。矯風會とは何だか、荷物でも届けて呉れたのか（大笑）と、思つて讀んで見ると、今度あなたが酒を止めたとをきゝ、實に喜び居る、先に酒を送りたのも砕はして、日本の人の酒を禁じたは、古今未曾有だと。私が砕した樣に大變譽め立てある（大笑）。だん〳〵讀んで見ると、矢島かぢ子、佐々木豊壽子と、夫れから私の名前が書いてある、二人とも御懇意がない、どーユー譯かと云と、「あんてす」、と妻が横から出る。「お前方々へ能く顏を出す人だね、こーユー手紙が來た」、「これはどーも宜しい、もー、こー、世の中に知れる、さま〳〵に書きたてられては（大笑）禁酒しなければならない」。忘れもしません、明治二十年の四月七日で御坐り升、私は考へた、も日本に是程知れた、又今迄のとを考ると、肉躰も損し、精神も腐らせ、人にも自分にも迷惑させた。私は其時英斷（大きな談ですか）禁酒するとに極めました。妙な者で、まー己れか飲むうちは、人のとも何とも思はんが、己れが飲まぬとなると、少しも猶豫しない、夫れから騒ぎ出して、

一生懸命になッて、コーユー風に集りて、日本人の發會に人を集め、酒の惡い事、今ま目が覺めた樣に、勸めをする、禁酒會を立てるから賛成しないかと云と、やはり誰も酒の惡い事は知てをる、知りつゝも一杯、二杯(大笑)、惡いと思ひつゝ飮んで居るから、誰が一人止めると云と、吾も〳〵と賛成する。夫れがあなた方の樣に物事を知てをるのでない、學問も何にも知らない、人斗りですから「酒の惡いとを知て止めると出來ない、惡いと知て止めないは罪である、賛成する人は立て下さい」と云たら、立た人が三十八人斗であッた。一時に意を決して禁酒したのが三十八人である。百人斗のなかで、三十八人。如何で御坐いますか、三十八人が同意して、夫から禁酒會を立て、夫からだん〳〵ヤッて來た。悉しきとは、ハワイ禁酒概況と云つまらないものを書いてをきましたから、夫に付て御覽を願ひたい。夫れから奬勵(シャウレイ)會を立て、毎日の樣に集りを開き、己れの飮まぬ斗でなく、人にも飮ませんと云樣に、奬勵(シャウレイ)して、夫れが爲に、全くバクチを止めるもの、今迄は本當に放蕩無賴で仕方がない役にも何にも立たんと云ふものが、立派の人間になつたものが、幾くらあるか知れん。其外、大概四千足らずの人の内には、一月に多くも八百弗も取る、夫れが是迄よりも倍位の金をためる樣な結果がありました。其中に、最も吾々が感服した一人は、山口縣の人で、川崎喜代造と云ふ。此男は、生來大酒飮みで、小相撲をとる樣な男で、酒とバクチを、職掌か義務の樣に考た人であるが、私が國へ歸らうとした時に、川崎が私の處へ來て「安藤さん、御歸りになるなれば、屆け者をして下さい」と云から「あんまり大きいものでなければ、持てゆきませう」と云と「金です、」「金なれば、爲替にするが宜しい、日本領事で爲替にしてやりませう」「夫はあなたの御隨意にして、下さい」と、十八弗二十五錢を出した。而して、御前の國は、何處だ、山口縣の何處かと云に、「之は山口縣へ送るのじやありません、之は政府へ持て行て下さい」、どーゆうわけかと、云と、「安藤さん、前に、私

は、あなたの勸めに依て、禁酒した三十人の賛成者の一人である、其日から、五錢つゝ酒を飲む代に貯へてをきました」、ハワイなどは、日本などより、極く酒が高ふ御坐い升、ブランデー、とか、ドランとか云ふもので、五錢や十錢で飲めるものでない、殊に川さきなどののむ酒は、二十錢位で、殆んど一日の給金は酒に填めてしまふ、其五錢宛が積で、一年で十八弗二十五錢になりました。此外に、酒を止めた爲に、眞面目に貯た金がいくらあるかも知れん、夫れで「どーか、此金は、政府に納めて、何かの御用に立て頂きたい」と云た。實に奇特なとではありませんか、是が學問があり、譯の分かつたものなら、兎に角、只の百姓で一丁字も知らんものが、眞の愛國心をあらわす、此金を以て政府に献上しやうと云のです、實に酒は恐しきものでは御坐いませんか。私は其金を預り、こちらに來て、政府に行きましたけれとも、斯樣な金は、政府にも夫々規則があつて、只擧て置く丈にして、學校の寄附とか何とかなれば兎に角、只献金とは仕方がないと云ので、未だ方がつかんて居りますが、をー滿堂諸君よ、一杯の酒を飲むと飲まんとに依て、斯の如き宏大なるとをするのは、何からで御坐りませう、只今云ふ通り、私が大酒飲で仕方がないものを、私の妻が、何にも働きのないつまらん女ではありますが、けれども、どーか酒を止めよと云ふとを、ひつこく私に賴みしに依て、私に此事をさせたより外に取り處がないが、私の身躰が酒の害よりはなれ、夫から今の日本人の禁酒會を立たと、今は何千人の人が擧て禁酒會のめぐみを受けるのは何でありますか。日本の禁酒會は、婦人矯風會の方々の手紙によりたとは確かです。是等は僅かなとの樣ですが、婦人の力から出たのであります。だによりまして、先程から申す通り、確に間違がない、女は男子にどれ程の力を與へ居るか知れん。

右に依りまして、禁酒の宏大なる利益を得ました、又夫れ耳ならず、今東京禁酒會と云ものが、當地に出來て居ります、此本は、誰か、誰が發起したので

あるか。御承知の通り、アメリカの、ミスアッケルマンが奔走して、今日八百餘名の會員であります。此成功と云もの、實に幾人あるか、數ふることが出來ない。私共此ミスアッケルマンの來られた時に、婦人矯風會、婦人白標倶樂部の方々、其他禁酒に熱心なるかた〴〵と、集たのが、今年三月二十日で御座り升た。ミスアッケルマンと、ミスター、ソーパの宅に會して、明日ミスアッケルマンが、出立する處で御座り升。處々方々で禁酒會員が出來、其日三百人も集りましたが、「御前もハワイに居て、多少禁酒の事に關係があるから、之をまとめて呉い」と云ので、私は力は足らんが、併しながら、喜しきとであるから、人々の驥尾に附して盡力すると云ので、其晩に厚生館に集りを開きました、集りは大層ある盛會でありました。翌日アッケルマンさんが立つ時に、ステーション迄送て行きましたが、其時、津田仙さん、麻布の農業雜誌社の津田さんが、禁酒に熱心なる青年の方七八十人を隊伍を整へて連れて來られ、車が今出る時に、ヅット、ステーションに並べた。皆んなアッケルマンさんに暇乞をするやら、いろ〳〵の事をしてをる。も滊車が出る時、蒸氣車のなかのアッケルマンよ、分れを惜しむ、又アッケルマンさんが、此盛なる有樣、日本人は義に勇み、惡い事はすぐ止める、皆んな若い人だちである、皆んな世の中に事業をしようと云ふ多くの若い人が、悉く斯樣な有樣で居ります、私はあちらこちら見てをりますと、一人の青年がヤッテ來て「安藤さんドーデショウ、萬歲と云ふも可笑シイ、何とか西洋の言辭がアローカラ」「西洋ではヒップ、ヒップ、フラーと云」ソコデ、私がヒップ〳〵と云と、皆んなフーラーと云ダ、滊車のなかから顏を出して、目に一パイ涙を以て、手にハンケチを振た。其時は、青年も皆目に涙を含んで居りました。私は其時の事を考へると、今でも愉快です。實に、日本人は義に勇む、已惚もあるか知らんが、愉快である。夫れから、ステーションから歸らうとすると御案内の通り、アスコの新橋の傍に、ポリス

が居る、而て一パイ人がたかつて居る、何だ、ヨッパライダロー、これだから禁酒しなければならないと云ながら、行く。案の通り、夫見たとかと云勢、若い人達だから、勢ひよく「禁酒萬歳」ボッスが止めるやら、大騒ぎ。其通りに續くなれば、今日は何の位か知れません、惜しいとをしたと思ひます、實に婦人の力の大きいと、御不同意か知らんが實驗であります。

私がことし、四月頃、川越に招待されて、行きましたが、川越の川角村と云ふ處に、禁酒會がある、そこに築地の女學校に敎へて御出の、潮田千勢子さんと、美山と云彼の宣敎師と、そこの禁酒會に演說に行きました、其隣村の禁酒會の會員が來て吳と云ので、私だけ、分かれてそこに行きましたが、宿屋に泊り、禁酒會の演說をしましたが、何處に行くも種がないから、同じ事を云ひます。夫れから引き取り、歸て、夜の十二時頃、二階に居ると、下でひそ〳〵と女の聲がする。二人の聲がさゝやきて居た、何だかしらん、今頃まだ人が起きてをるか知らんと思ふて二階に居りますと、其内女が二階の、私の處へ來て、「御迷惑樣でも、一寸御談したい」と云から、起きて「何んです」、「來歷を談さんと分かりませんが、感ずる處がありますから、何卒聞て下さい」と云ので、そんなら聞きませうと云た。其女のなりは、丁度年格好二十四五位である、そこの宿屋の酌取でもしてをる女であるか、「私はもと此近所の學校の敎師の妻でありましたが、其敎師が酒が好きで、常に酒を飲むとから、ソレが原で吐血して死に、子供が一人ある、其子供を外へ預けて、此の家へ來て、下女奉公して居ります、私の職掌であるから、私の夫の生命を取られた酒を惡ひとも思わず、人にも飲ませ、自分にも飲み、酒を元手にして暮して居る、今日も朝から客の相手などをして、ほろゑいで、あなたの演說をきゝに行きまして、世の中に、同じ婦人でありながら、他人にでも酒を止めさせ樣と骨を御折なさることを聞き、私は現に良人が酒に依て生命を捨たことを知

てありながら、此酒にこびる、其酒を以て客の生命を縮めた事、實にあなたのお談を聞て、きもをつぶした、同なじ女でも、酒を止めることに熱心に働き居るに、私は自分でこんなにあるかと、思ふて、私は歸りておかみさんに其事を話し、此の宿屋の亭主が大酒のみで、常には極く温和な人で、私共にも目をかけて呉れますが、酒を飲むと、遠慮ゑしやくもあく、をかみさんは、生きずが絶へん位である、どーしてよかろーと云ふ時に、禁酒會と云ふものがあつて、禁酒會に入ると酒を止めることが出來るなら、私はどんなに幸ひか知れん」と云た。私はそーいふ事なら、あすのあさでも宜しい、今夜でも宜しいが、何しろ話をして見たいと、其晩は遲いから、夫れ限に、明朝にあると妻君と下女と二人が、私の處へ來て、昨晩此女から御話をしたことをきゝましたが、私の良人を禁酒會に入れたいから、どーか說得を願たい、私はなか〳〵出前の一寸の話位では、よく分かるまいが、何しろ先づ話をして見ようと云た。夫れから、

下で、なんだか、ゴト〳〵音がして、居りましたが、二階から、御かみさんが引き上げ、下から下婢が押し擧げる。其人を見ると、でく〳〵した、如何にも酒を飲み相な人だが、武骨な人で、前へ御出なさいと云と、のそ〳〵出て來た。「御前さん、酒が御好きだと云が。私も實に好であつたが、自分に酒を止めると、人にも迷惑がなく、自分にも身躰もよし、又經濟にも宜しい」。「どーも酒と云ものが、本當に止められるものですか」。「止められますとも、酒德利や、ちよくを外の方へやつて、しまへば宜しい」。「飲みたい」。「飲たいときには、飲んじや惡い、飲んじや惡いと云(大笑)です、譯はない、承知で飲むとは極く惡い」。「止めやうか」。「かもなんにもない、今こゝて御止めなさい、人間は宜しいとを知て行はんは罪である」。又「考へて」。「何に考へるも何にもない、斷然御よしなさい」。「よしませうか」。「あなた御止めなさい」。「旦那御よしなさい」。前から私が、「もー御よしなさい、やめますと御云なさい」。「うー、うー、

止めます」。晝の十時頃でありました、皆んな私に禮を云たが、私も喜しいと云て、去りました。どーで御坐り升か、是もやはり、一二の何にも働きなき女の力に依て、男子が酒を止めると云樣になつた、學問もない、何にも知らんものが、酒を止めさせる事が出來る。あゝ實に婦人の方々、是から母になる皆さん、酒を止めさせる計りでなく、酒と云ふことは決して口にもいはん樣にして頂きたい、其良人なり、親類なり、其他酒を飲むに因緣のある方は、どーか酒を止める、止めさせると云決心を以て御よしなさい。德利も、猪口も外へやつてしまへば、大層に功がある」。處でこうゆふ樣にと、婦人の手が禁酒をさせる、婦人より外には力がない樣に云ふが、私の考では、婦人と青年である、年寄にも關係があると云が、一には最早餘命もないから、是から社會に十分働き、社會に力を入れようと云のは、婦人と青年であります。青年の事に付て、宏大なることがあります。宇都宮海軍の大軍醫は、自分の息子の爲に酒を止めた事を見ました。實に婦人の熱心、青年の後進の方は、此世の中の人をして、惡から引き出す廣大なる力があり、利益を人に及すと云ふことが、禁酒會の月報のうちにあるから、委しくは云はんが、禁酒會の月報を御覽下さるとを願ひます。併しかいつまんで申しますと、此方は、山口の方であるが、私が香港の領事をして居たときに、筑羽艦に乗り、香港へ御出になりましたが、酒飲み仲間はすぐ懇意になり、宇都宮さんと飲む上で、大層近附きになり而てハワイから歸る時に、船の上で御目に懸り、殆ど十年ぶりで遇ひました。其時の船は、たしか高砂丸であると考へますが、其船は日本の地方の人が乗て居りましたが、宇都宮さんは、朝からポツ〳〵晩迄飲んで居るから、「宇都宮さん、相變らず、酒が行きますな」。「エ、實に酒です、あなたは見る處、飲まない樣だ」。「私は止めました」。「どーいふとから、何にか身躰でも惡くてか」と。「イエ、幸ひ、身躰がよいうちに止めた」。「夫れは宜しい、併しながら、酒は

どーも止まないものです」と云て、グビ〳〵飲んで居られますから、夫れから妻が、「ドーモ、併し、止めさせたらどーですか」と云ます。「最早五十以上で、朝から晩迄酒の氣がないとがない位であるから、とても」。「何に搆ふとはない、酒のことですもの、云て御上げなさい」と云たが其頃は、弱いもんですから、搆はずに居りましたが、「一年でも二年でも、酒を止めれば功能があるから、言ておあげなさい」。「けれども、左樣に云のもいやだから」。丁度、津田さんの「日の丸」と云ふ禁酒雜誌を五六冊以て行き、御讀なさいと云ふとが出來んから、窓から、其「日の丸」雜誌をソッと入れて置てきたら二三日立てから、「安藤さん、どーも恐れ入た。」と見ると、酒の氣がない、「安藤さんどーも甚だ恐れ入た、酒は止められるものと見へる、現に君が止めた」。「して見ると止られるか」。「止めやうか」。「止めやう。かも、何にもない、直です、直にお止めなさい」。「止めやうか、飲まうか」。「お止めなさい」。「實に息子、むすめも、妻も、何にもかも安心する、本當に止め樣」。どーです、驚きました。夫れから、宇都宮さんの止めたとを、方々へ吹聽しなければならない、なぜなれば、默てをると、又勸められて呑むから。夫れから船の部屋每に、宇都宮さんが酒を止めた、〳〵〳〵。丁度航海のあとだ十二日斗が間だ、一滴も飲まない、朝からぐび〳〵飲だ人が、一滴も飲まない。どーも。不思儀です、「安藤さん、止めるを、穢い談ですが、げつぷが出なくなる、止めると頭痛がしなくなる、止めると、止ると」、と云て斗りをる。夫れから、「私は、實に不思儀なとがある、病人に酒が惡ひと云ても、自分が紛々香はして居るから、澤山飲んでは惡い、澤山飲んでは惡いと云ふ形容詞をつけて、居た、酒は澤山飲んではいけないと云たが、もー是から形容詞も何にも入らない、はつきりと、飲んじやいけないと云ふ事か出來る。」澤山飲んじやいけない、本當です、僞じや有りません、あまり本當に云から、あなた方は笑なさるが、僞じやない、本當です(大笑)。夫れ

から、「も、私は止めます、是から禁酒をします」と云た。どーか知らんと思たが、夫れから、船がつき、丁度いろ〳〵ごた〳〵した時で、大隈さんが賊手にかゝりし時であるから、どーいふ事も出來ず、二三月立てから、宇都宮さんのことを思ひだして、新錢座に居る事を聞き、訪ねましたが、丁度留守で、妻君に遇ひ、まあおあちらへ上れと云ふとですから、上て、偖宇都宮さんは如何ですと云たら、あの酒ですか、實はとんでもないことをしました、いつも歸つた時は、つけて置きますものだから、ちやんとつけて置かんと、大變をこられますから、いつもの通り、かんをつけ、肴を揃へて置きましたが、何だかむづ〳〵してをるから、どーも不思議、酒が惡いのか知らん、何處の酒にしませうと云うち、一本飲でから「私は船の中で、安藤さんに遇て禁酒した」と云ことを談した、夫は結搆だが、初めうち〳〵して、一本飲んでから(大笑)、(大分お笑になるから、御覺があるか知らん)夫れから私もいろ〳〵で忘れて居りましたが、

此間丁度八月斗り立て、私の處へぶらりとやつて來て懐から五圓、だして、私の前に置た。なんです是は。どーか此五圓札を、何か禁酒會の入要にして頂きたい。併し是はあまり澤山だが。否之に付ては談がある、國へ行た時、國の人が、ゆるさん、私の處へ、酒を以て來る、肴をこしらへて來る、迚も飲まないじや居られん、處が、今度非役になつて山口へ行く時に、家内を引き取ろーと云ふ時、本鄕に殘て置た、むすこから、手紙をよこした、其手紙を見せた、其手紙は、月報中に戴せてありますから、どーぞ讀んで下さい、夫れで「國へ行くと、飲みなかまが禁酒させますまいけれども、あなたが禁酒して下さらないと、まことに氣にかゝつて、學問も出來ない」と云ふ意を、含み居る。こーいふ手紙をよこしたが、若いものに學問も出來ない樣なことをして、あんぼでも飲むとが出來ない、就ては、息子からこーしたと云ふとをたてにする、も一は、禁酒會員と云あらはしをしたいと思ふから、之を寄附します。「夫は結搆です、

令息は何歳で」。「十七です」。武夫さん、宇都宮武夫さんと云ふかたです。「今度と云ふ今度こそは、大丈夫酒を止めます、併し安藤さん酒を止めると、甘いものがすきになりますけれども、家内中寄合て樂しむヿが出來る、妻も、子供も、酒を飲む時には、一處に居るヿは出來ない、こはいから、なるたけさけてをる、併しながら、時々ボタ餅や、大福餅を外から買て來て、くるま坐になつて喰べる」。子供が此間も、此位の御子さんですが（手まね）、「御父さんが御酒が止んだら、甘いものが食べられると云た（大笑）」。本當に徳利のあつた時より、家内が優々和樂して、樂みがある。又宇都の宮さんの言ふには、先達ある老人の處へ行きましたに、「宇都の宮さん、じようだんしてはいけない、禁酒でもないじやないか、是からして幾年生きる積りか、御前そーたがゆるんじや仕様がない、節酒が宜しい、私共とより合ひ、一杯も飲んで呉れないじや困る」と云た。其時に、自分ながら感心な答をした」。「どんな事を云たか」。「幾年も餘命がないから、私は禁酒した、まだ若いとか是から先き澤山生きるなら、そーはしない、私は酒の經驗に依ると、酒位人を怠惰にするものはない、一杯のむと、今日する事も先づ出來ない、遂に其日は一日飲む、其夜は早く眠る、又飲み過すと、器械など打ち碎すヿがある、實に酒の爲には生命を縮られる、夫故に、今日止めるのだ」と答たが、其人が感じて呉れましたと。私も實に感心しました。夫れから愈出立の時送りに行きましたが、新橋の前の家に、宿を取て居られ、其處で送別會を開いて、家内皆共に居る。「安藤さん、今此送別會に並び居る人達を見回すと、昔してあると、酒を飲むやら、藝者が來るやら、大騒ぎであるが、此大勢がより、子供も妻も、一處に食事をして、是から又ゆる〳〵送別の談をして、そーして快よく別かれるヿが出來る、若し酒を飲むと、子供は來るヿが出來ない、實に此幸は禁酒の徳であります、こゝにをる大勢の大學校の人々も、私が飲まないから、皆んな温和しく扣へて居る」と、喜んで談されましたが、實に青年の方々、宇都宮さんの樣にするのも、皆これ青年の力であります。だに依て、私は、考へるに、婦人と青年は、實に禁酒上に有益なる仕事をなすものであるから、どーか青年の方、婦人の方々か、奮發して、社會の矯風に從事して頂きたい。

遞信省認可

東京麹町下六番町六番地
女學雜誌社

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

以て國民の品格を高くするに在る耳、其敎訓、其訓誡を論ずるの外、其如何に世を經過せしかの摸範を示して以て向ふ所を知らしむるに在る耳、唯其言語が訓戒とするに足る耳ならず、併せて其行爲を以て訓戒とするに足るべき者を求めて、之を仰視せしむるに在る耳、孟軻氏曰く、伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立る有り、又曰く柳下惠の風を聞く者は、鄙夫も寛に、薄夫も敦しと、吾人は其生涯の行爲、磊々落々、天の如く、神の如く、「シミ」なく、疵なく、萬世の師範たるに足るものを世界の中に求めて之を頂かざるべからず。

蓋し大なる國民は大なる英雄を奉じ、小なる國民は小なる英雄を奉ず、此理必しもカライル氏を待ちて後に知る程の秘密に非ず、國民の理想とするところ低くんば、其國民も亦低からざるを得ず、國民の理想とするところ高くんば其國民も亦高からざるを得ず、故に吾人は英雄を仰がざるべからず、而して其英雄は最大至純の者ならざるべからず。

吾人は今爰に印度の公子とナザレの木匠とを比較せんとする者に非ず、何となれば、斯る議論は「宗敎家」として徒らに爭論の資を作るが如きものたるのみならず、其生長の年歷さへ、種々の說ありて殆んど神祕時代に屬するが如く見ゆる瞿曇氏とヲーガスチン帝の時に生れ、ダイベリアス帝の時に殺されし、純然歷史上の人物たるイエス、キリストとを比較せんとは少しく不倫の嫌あればなり、而れども吾人は爰に確乎たる信用を以て、イエス、キリストの人品は信に世界の師範として仰ぐに足るべきものなることを敢言せんとす、思ふにゾロアスタル、釋迦の如き文籍未だ備はらず考證未だ全からざる、時代に屬する人は之を措く、歷史以後の人、ソクラテスと雖、プレトーと雖、孔丘、老冉、莊周と雖、之をイエス、キリストに比すれば、光芒太た減ずるを覺ふ、是余一人の私言に非ず、又「クリスチアン」の偏說にも非ず、歷史を編む者、悉く之を認む、ルーサーも之を認め、ギボンも之を認め、レナンも亦之を認む、我日本の精神的改革を圖る者 焉ぞ目を此に注がざる

吾人は似て非なる者を惡む、更に名を宗敎に借りて實なき者を惡む、聞く獅子の身中に虫ありて獸王だも、猶之が爲に殺さると、彼の宗敎の名を以て、世に行はるゝ虛禮、空文は奚ぞ基督敎の獅身蟲に非んや、それ藩籬は以て侵掠を防げども之が爲に其室內の玲瓏を遮るべし、世の所謂神學なるもの、禮式なるもの、或は恐る之れが爲に基督の品格を蔽はんことを

を、而れども仁を啖ふ者は穀を割らさるべからず、其永々しき祈禱に避易し、其クド〳〵しき禮拜に避易して、其内に存する甘實を味ふ能はずんば、寧ろ智者の事ならんや、基督嘗て曰へり我は道なり、生命なり、光なりと眞個に基督敎を脩めんとするもの、眞個に基督敎を攻擊せんとする者、焉ぞ其本に返りて、基督の品格を研究せざる、庶幾は以て無益の爭論を止むべし。

嗚呼、東靡西靡して其日其日の風に任する楊柳的の人物は以て今日を支ふるに足ず、天德を我になせり桓魋夫れ吾を如何と云ふが如き、智慧は智慧の子に義とせらるゝありと云ふが如き、信任なく、獨立の思想なく、唯社會の潮勢につれて浮沈するが如き人物は、日本の國運を支ふるに於て何か有ん、心に些かの平和なく、利奔名走、汲々として紅塵埃裏に沒頭し、王公に媚び、鬼神に諂ひ、人民をアザムク者何ぞ言ふに足らん、今日は實に嬌〳〵たる勁骨を以て、信仰あり、平和あり、獨自ある所の男子漢を要す、女丈夫を要す、十年以前までは我「サムライ」族は實に英國中等民族の如く世界眼ある者の畏るゝ所たりし而して今や彼等は消し去んとす此物質的文明波瀾の中に立ちて精神的文明の砥地たらんとする者は自ら重ぜざるべからず、我「キリスチアン」たる者は深く自ら敬はざるべからず。

家政

書簡を認むるの時如何

碓氷山人譯

書簡を認むるの才能を要すると共に何時之を認むべきかを知るは甚だ必要の事とす、是を知るものは只夫れ眞情赤心を以て書簡を認むる人のみ。

人若し他家を訪問せんと欲せば必らず先づ其時を通知し、返報あるを待つて後行くべし、是即ち他家に差支へある時に訪問せざらんが爲めなり、例之兄弟姉妹の如く親近の人を訪はんとするも必らず豫じめ通知し置くを可とす、蓋し何處の家と云へども外來人あるを欲せざる事屢〳〵あればなり、亦熱病或は痘瘡の如く傳染病を患ふるものある家は訪問すべからず、亦自ら傳染病を患ふる時之を通知するなくして他家へ行くべからず。

若し他家を訪問して後家に歸らば其恙がなく歸宅せしよしを他家の妻君に報じ、其道すがら見聞せし事共通知すべし、此時は例之單簡なるも必らず郵書にて通報すべし、書信使の如きに托するは禮を欠くものなり（譯者云はく是即ち西洋風なれば我國にて之を失禮とせずば强ち西洋風に從ふを要せず）。

他より恩愛を受くる時、若くは物品を贈與せらるゝ時、感謝の念を表するは人の天性なり、嘗て或人結婚の式を擧ぐ、知己友人皆物品を贈つて祝意を表す、或人之に向つて遂に謝辭を呈せず、一人あり、甚だ怒つて曰く彼若し再たび婚するも重ねて贈るまじと、是正當にして兼而自然の思想なり、亦人我爲めに厚意を示さば直ちに之に謝して「難有し」と云へ、之を云ふは速かなるを要す、蓋し何人も返事を得ざる時に於ては再び厚意を表せざる可ければなり。

人若し我熟知する所を質問し、若くは我力の及ぶ所の助力を乞はゞ直ちに書簡を認むべき時とす、思ふに其救濟を乞ふの人は我より多く欠くる所あるに由らん、我等世にあつて他を助くるは最も美擧たるを知る、何となれば我救助する所の人は亦他をも救ふべければ也、世に最も強き人すら其勢力の衰ふを感ずる時あり、此時に於て他よりの一言も尙大ひに奬勵奮發の氣を起さしむる事あり、手紙を認むるの必要は斯る時にありとす。

自ら熟知せる事を他に質す勿れ、然れども若し己が力の限り考究し、方法を盡せる後尙了解し得ざる事あらば、之を己が信用する（答へ得るの）人に問ふべし、答案を得ば直ちに謝辭を述ぶるを要す、是亦禮義の一にして之を守らば幾多の人に滿足を與ふるを得ん、只夫れ滿足するが故に必要ある每に人助言を與ふ。

知人朋友にして困苦に陷るものあらば必らず書簡を認めて以て之を慰問すべし、凡ての事を忘るゝも是のみは記憶するを要す、何となれば人獨りにて困苦を忍ぶは甚だ苦しければ也、此時に於ては「我君と共に悲しむ」と云ふ同情の語を以て慰むべきを記すべし、溫情恩愛を示すは人を正路に導くの好方便とす。

人の結婚する時及び兒女を擧げし時は直ちに祝辭を述ぶべし亦友人の他鄕異國に旅立つ時は書簡を送るを忘るべからず、蓋し人旅行の時に於て親愛眞實の書簡を受くる程喜ばしき事なければなり、之が爲めに旅中幾多の愁憂も拂ひ去らるべし。

終りに尙一ツの記すべきあり、人の誕生日に於て祝辭を述ぶるの事なり、よく知人の誕生日を記臆して祝するものは人に喜ばる、そは人皆祝せらるゝを喜び、祝する人に對して好意を持するは自然の性なれば也、要するに書簡を認むべきは他人を助け、若くは祝し、或は厚意に謝するの時なり、是を是れ書簡につきての金科玉條となす。

○飯の炊き方改良

老農船津傳次平君が、改良飯の炊き方と云ふを聞くに、總て飯を焚くには、時間を短かくし、剛さ柔らかさの適度を得るを要す、其改良法を述んに、是迄の炊方は飯釜と竈と密接し居ものなるが、是れ甚だ宜しからず、故に鉄火箸二本を以て竈の上口に渡し(但左右)其上に釜の鍔を載せて、竈と釜との間に間隙の出來る樣にし、又其薪は凡そ七八寸の長に切り火を焚ば、一升の飯には凡百二三十目位の薪にて出來、時間も短かく炊ぐ事を得べし、此法に依て炊ぎたる飯は、光澤善く味甘味にして、之を食用するに消化し易し、啻に經濟上の良法なるのみならず、亦攝生上に大効あり。

○溜める金、溜まる金

山梨縣甲斐國南都留郡に於て、敷物もなき小屋に生れ、今は相應の金貸となりたる、或る老翁の話を聽くに、曰く「溜める金を溜めると勿れ、溜まる金を溜めよ」と、味ある言葉といふべし、世には詐譎狡猾を以て、金を溜めんと欲して溜める者多く、勤勉節約を以て、溜まる金を溜める者少なし、翁、目に一丁字を知らず、經驗よりして、此哲語を發す。

小說

社會改良

第壹回　(上)

長島操

友人長島君感ずる所ろありて小說を作り遠からず世に公にせんとす、今ま其中の一篇て拔きて讀む人に紹介す。編者誌。

(紳士)何だ、政治家に成りたいと云ふのか「紳士の言葉は少し押柄なれど、常に聞き慣れて居るにや、少しも怪む氣色なく視線の疊に落ちたりし眼を、漸く高め、紳士の胸迄及ぼして」堂も、私の性質は、一番政治家に適して居ます「紳士は少し猶豫し居しが」、財產は有るか(少年)財產は、少しも御座りません(紳士)財產がなくては、今迄の仕業は出來まい(少年)尤兄の財產は有りますが、私の財產と云ふは有りません……今迄の學費は、兄から貰ひましたが、以後は一切與れぬと言ふて居ります「紳士は、今迄手にて烟草を巻き居りしが、少年の言葉の終るを待て、下に置き、少年の顔を熟視し居たり、蓋し、此少年は、常に紳士の家に出入して居たるな

らんが、今迄己の方向に就ては、談ぜし事なく、今は或學校を卒業し、社會に出るに方つて、常に信用せる紳士なれば、己の性質を述べ、嗜好を話して、前途の方向を指定せんと思ひ、今改めて紳士と談ずるなり、紳士は厚き唇を開き「何が出來るか「少年は、此時始めて紳士の言葉に注意し、少しく其押柄なるに驚きたり、此紳士、平常の談話は、言語も是より丁寧にて、少年を遇するに、極めて熟練の紳士なれば、談話に拙なる少年も、紳士の談話に伴れて、思はず知ず、己の意中を語り、少しも憚る事はなく、宛も友人と談話するが如く、少年をして、少しも窮屈を感ぜしむる事はあかりしに、今日に限り、紳士の口は堅くして、容易に開かず、折々簡單なる一語を發する已、初の內は、別段氣付かざりしが、不意に財產を問はれ、今又箇樣の問に、世故に慣れず、交際に長ざる少年の習として、改つては話もし惡く、今の一言は、胸に針、總身忽ち震動し、何と答て好からんやら、演舌が達者と云はんか、否々、人を統理するの能ありと云はんか、否々、今更思へば、是ぞと云ふ出來る者は一もなく、何と答へて好からんか（何と…何と…困る…困る…）と云ふ考が、僅か一瞬間に、數回胸中を往來せしが、差迫つたる答に、餘程困難の樣見へて「別段是れぞと云ふて…「急に何か思ひ出せしにや」然し「と云ひ掛けしが紳士は後の言葉を耳へも掛けず、命ずる樣な敎ゆる樣な口調にて」政治家は金持の仕事だ金のない者には、政治家には成れないよ「紳士の言葉は餘り嚴格なりしを以て、少年の胸迄出し言葉は消滅し、暫くは胸中混亂し居たりしが、勝利を得たる考忽ち跳り出し」私は、終身快樂を捨て、如何ある困難に遭遇するも、撓まず屈せず、何處迄も、目的を達する決心であります「紳士は、少年の顏を熟視すれば、熱心の氣面に溢れ、斷乎として動かざるの氣色見へければ、少しく考ひし樣子なりしが」自分は兎もあれ、妻子は堂する氣か、（少年）妻子は持ません（紳士）妻子を持たぬ…人たる者が、妻子を持たずば、不具と同じ事だ、壯年の時は、其れで宜いが、老て誰に養ふて貰ふ積りか（少年）其れは、終身持たぬと云ふのでは御座りません、己れの目的を達する迄（紳士）終身目的を達する事が出來ねば（少年）仆れて而して後止む積りです（紳士）其れは丸で氣狂ひの考だ金のない者が、政治家に成ふと思ふのは、自分の家を捨てゝ置いて賴

まれもしない他人の家を、守つて遣る樣な者だ……未自分の頭の蠅が追ひないに、人の頭の蠅を追ふと云ふは、餘り飛越ひた話じやないか……、目的の達しられないのは、解り切つて居る、……困難艱苦を犯しても、國の爲、人の爲なら、厭はぬ抔と云ふが、其れは表面の話、裏面には人は兎もあれ自分は立身出世して、人より多くの快樂を、取り度と思ふのが人情だ、人情は決して矯められる者ではない、一時は矯めて眞實左樣な結構の志も出るが、其れは血氣の勇で、若い内許り、漸々年を經ると、成る丈自分の安全幸福を圖る樣になる、自分の安全幸福を圖るには、政治家の樣な危險で、勞して功なき事をするより、商人に成て金を儲くる事をしな、金程世の中に尊い者はない、實に拜金宗の世の中だから、早く金を作らなければ不可……、誰も金を嫌ふ人はないではないか……、未世の中の事に暗から、そんな事を言が後に臍を噬でも及ばんよ……惡い事は言ないから早く金を儲、妻でも持ち、父母にも安神させるが好い、妻子を持たず財産はなし、何時迄も下宿屋住ひでは、志許り立派でも、人が信用せぬ……、其許りではない、快樂と云ふ者がないではないか、幸福と云ふ者が無いではないか、……人間にして人間の樂みを知らないのだ……、早く蓄財し妻を娶り、共に働て老後の用意をし、子孫の爲を圖るが、今日人間の職分、其れが正則だ、「少年は暫く無言なりしが、其間紳士の言葉を一々己の考と較べ居りしならん」私は……「此時兩眼既に潤み渡りて、淚將に滴らんとすれば、一身を凝らして堰止めたれど、折角の苦心も其甲斐なく遂に溢れて膝に一滴、」私は……慷慨で堪ひられません、「と言ふや否今迄僅かに關止めし淚は宛かも大河を決せし如く、潸然として底止する處なし、紳士は見るも氣の毒と思ひ、顏を背けて居たりしが、少年の淚を拭き取るを待て」何處が慷慨か…其程迄に「少年は己の泣顏を見られしは、流石に極惡しく、鼻洟に紛し淚を隱し、儼然と構て」私は今の日本の道德社會を觀れば實に慷慨に堪ひられません……、上流に位して人の龜鑑ともなるべきの人が、德義を重じません、在朝在野の政治家は、皆不品行極ります、國家を治むるの位置にありながら、己の一身が治まらず、內に數妾を蓄ひて居りながら外に出づれば、或は藝妓に戲れ、或は娼妓に耽りて、少しも恥づるの心が御座りません、私は如何なる點より論ずるも、當時日

本に於て娼妓の必要と、妾の得策を見出す事が出來ません、ホームの美と云ふ事は、誰しも望む處で御座りませう、然るを日本には、此汚らはしき、此惡むべき制度がある爲に、只だに稱へる許りで、眞に其快樂を味ひ其幸福を享くる者は、誠に鮮くあります、私は政治家に成て、功名利達を望む心得では御座いません、己は政治家に成て、世人に政治家たる者の、最重すべき德義と、愛國心と、節操とを知らせて、日本の腐敗社會を救ふ心得であります、當時政府の「此時紳士は遮て」娼妓公認の制度は固より正道に認めて措く譯ではない是は施政上の一種の變則にて、道德より論ずれば、一日も存すべき者でないが、古來よりの習慣に因て、直に除く事が出來んから、不得止して措くのである、只に外形の美を慕ふて一時に是を廢せば、强姦、和姦、密賣淫、私生兒の繁殖、梅毒の蔓延等、種々雜多の惡風並び起り、道德界をして倘更腐敗せしむるから、未廢娼論を唱ふべき時世でない、余は固より廢娼の美擧なるを唱ふる者だが、當時の廢娼論には贊成する事が出來ない、斯く言ふた處が、當時亦熱心に存娼を唱ふるにも贊成が出來ない、時機と云ふ者は知らず〳〵の間に來る者だ、其時機さへ來れば、自然に行はれる者だ、娼妓の如きは、國の內所事である、其れを公然廢すとか、存するとか爭ふは、實に君子の恥づる處ではないか、是等は傍觀して居るが宜い、一夫一婦の制度も、誠に善良ではあるが、其れを法律で定めた處が、其れは表面許り、裏面には數妻の制が行はれて之を禁する迚到底止む者でないから、之を八釜敷云ふは誠に無益の事ぢや、是等は金持ちが金を費して遣るのだから仕方がない、其れも弊害と知つた人は、金を持ても爲ないから宜い、是れ皆人事であるから、八釜敷言ふには及ばん、自分の身さへ正しく、世人に對して恥かしからねば、其れで澤山だ、今傍目で見るから、政治家も不品行に見へ、官吏も不德義に見ゆるが、自分が仲間には入て見れば、別段慷慨する程の事もない、知らず知らず、自分も行ふて居るのだ、少しの弱點は人間に免れん事で、位置を更ゆれば皆然りだ、八釜敷言ふ人も言はるゝ人も、皆同じ事、罪が何方に有るでもないから、結極言はるゝ位の位置にあるのが得策で、不平を唱へて居る人は損さ……、

理學

吉田伸子

○氷の水面より結ぶわけ

凡て物躰は、固躰でも、液躰でも、又氣躰でも、之れを熱すれば膨脹し。冷せば收縮するが、一般の法則なれども、水は少しく此法則に外れた所があります、乃ち或る温度の水を冷しませば、攝氏の四度までは、冷ゆるに隨て收縮しますが、四度以下に温度を下しませば、復次第に膨脹します、水の此特性こそ氷を其面に近き部分より結ばす原因であります。

寒夜、水の表面は直接に冷氣に觸れます故、先づ冷えて收縮し重くなりて下に降ります、之れに代りて新に表面となりました水も、亦暫くすると冷えて重くなり、又下に沈みます、斯の如く、かわる／＼浮沈して、終に全池の水の温度が攝氏四度まて冷えませば、其時表面となつた水は前に申した水の特性によつて、其上温度が下りませば、却つて次第に膨脹して輕くなり、隨て下に沈むことはありませぬ、ソシテ此水面の温度が零度に下りませば、水は忽ち氷結するのであります。手短に申しませば、水は氷るべきときには水底に在ることなく、必ず表面にある故に、氷も水面より結ぶのであります。

○氷の力

水の温度が攝氏の零度になりませば、其水は直に氷となりますが、其際多少膨脹します、乃ち零度の水が氷となりませば水であつた時より其容積が少しく増します、其割合は僅ですが其力は非常に強いもので、寒夜に陶製の花瓶や水鉢などのこわれるのも、全く此膨脹力の仕業で、又大なる岩石の段々こわれて、遂に土壤となるも、亦此膨脹力の仕業です。

○鉄瓶の湯垢

天然に在る水は純粋と申すべきものはなく、皆多少の瓦斯類又は鑛物類、時としては有機物を含で居ります。就中泉水井水等の多くは石灰の鹽類を含で居ります、特に炭酸瓦斯を含で居る水は、多量の炭酸石灰を溶解して居ります、若し此の水を沸騰させませば、其中の炭酸瓦斯が逃げ出しますので、是迄溶解て居た炭酸石灰も亦此の水中に溶解て居ることが出來ずして、其器の内面に附着ます、久しく用ゐた鉄瓶の内に附着てある湯垢なども、全く此原因から來た、炭酸石灰であります。

兒籃

熊の入婿のはなし

ふみ子

むかしある山の奥に住んで居升た熊の息子が、鹿の娘に懸想いたし升て、どうぞあなたのお孃樣の、養子にして戴きたいと、父鹿に申込みました、父鹿は、其類がちがい升からッて、誠に此事を嫌ひまして、熊の樣なものを婿に貰ひては、娘のみか、此親までも、迷惑する、どうかして之れを斷る工夫はないか、けれ共熊は、われ〳〵よりも余程強ひから、若しも熊の御機嫌を損じたならば、どんな難義が來ようも知れず、どうしたらば、都合よく斷はれるだろふと、いろ〳〵に思案致し升たが、やがてキッと、一計を思ひ付きまして、熊の方へ參り、謹んで申升事には、

「今般御申入れの事は誠に有難い事で、私共鹿なかま全躰のほまれと存升る、就ては早速御受けを致升る筈で御座り升が、一應娘に申聞せてと存升て、娘の所存を聞升た處、娘も誠に喜び升て、仕合な事と存升が、只あなた樣の、お齒や、お爪がこわいから、どうぞ其御齒を拔き御爪をお切り遊ばし升て、其上で御越下さるならば、誠に有難い事だと申升た」とおそる〳〵告げ升た、熊の息子は、之れを聞き升て、直にウン〳〵宜しい承知々々と、申し升て、爪を切り齒を拔き、これでこそ、鹿の娘が、喜んで迎へて呉れるだろふと存升て、イソ〳〵として參り升た處が父鹿は熊の樣子を見升て、身に備へのないものは、もう恐るゝに足りないと申升て、熊が這入ろふと致し升處を、グッーと一突に、角もて遂に熊を突き出し升たといふ事です。

ですから皆さんも、能く氣を注けて、人が假令何と申升ても、自分のなすべき事はして、人の爲に、決して動かされてはいけません、何處迄も自分は自分で一見識を立てませんと、遂には此熊の樣に、他の爲に、なぶりものにされ升よ。



文學

池袋淸風大人批（東京案山子の屋社中）

寒草　寒蘆

○ふすまゝに池の蘆原氷はてゝをしかふすまとありにける哉
（み雪ふる）（枯れふし）（の）

評 何かふすや突然也氷りはてゝにては副詞にならず亦ふすまさいはゝ雪さもいはなくてば

雪

、、照る月に光かはして○雪のひまに遠く流るゝ大井川かな
（○白）（中を）（白川の水）

評 若しいきおひつゞくならば一首の中に同じ言葉を出しても○よし上の例 みよしのゝよし野の山のしら雪の雪けにくもる冬ぞものうき

、、松風の音を聞くさへ○寒けきを高根の雪に月○殘る也
（○も）（○にほへる）

立春

、、ふしのねの霞の内にあく田都の聲より千代の春は立らん
（朝日の影）（や）

評 霞の内にては前より霞みたる後に春が來るやう也

、、今朝よりは○か音空に あく田都○の聲も雲井に霞なりふしの高ねに春や立らん
（深雪も）（しろらん）

撰集抄の序

西行法師

生死の永き眠、いまだ覺やらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月をまことゝ思ひ、鏡のうちの影を、げにと深く思ひいりて、わけくれば、たゞ妄心のみ打つゞきて、生死の船をよそはずして、屠所の羊の歩みは、我身の外にもてわすれ、鳥邊野、船岡の煙をよそに見て、すぎにしかたは、四十餘年の霜を頂き、行末知らず。今日にしもやあるらむ。さは同じ夢の中の遊びにも、しんきうの賢き跡を撰び求めける言の葉をかきあつめ、撰集抄と名付けて、座の右におきて、一すぢに智識と賴まむとなり。本は九品の淨土におもひあてゝ、十に一をもらし、事は八十すゐかうに思ひよそへて、百に二十を殘せり。抑、凡夫のならひ、明眼しゐて眞月を見ず。たんまうの利劍おこらざるものなり。されば偏に冥助を仰ぎ奉らん爲に、卷毎に神明の御事を、記るし載せ奉り侍り。



批評

○國民之友新年附錄　撫象子

一。九十九の媼は、余れ終り迄で讀むとを得ざりき。

二。嵯峨の家主人が「夢現境」は、近ごろの傑作なり、題して夢うつゝと云ふ、啻に孤影が之を觀るとの現夢茫然たるにあらず、人心善に進むの路次亦必らず此境を經過するとを知るべし、初は鬱憂にして世を墓なみ、中ごろは妄想に誘はれて幻ろしに迷ふ、終に失落身を執迷より離して絕望の淵に臨み、魔鬼の襲擊に敵すると能はずして、喪然自ら殺ろす。夫れ死するは即はち生くるの門なり、經に云く、人生れ替はらずんば天國に入ると能はずと。夢中の孤影は良心の幻像なり、彼れ一旦死し、寤めて則はち神に歸す、彼れ既に救はれたりと謂つべし。あゝ、吾人は近來如此き大詩想を含みたる日本人の小說を讀みたるとあらず。

三。「罔兩」は南翠外史の爲めに、「破摩弓」の恥を雪ぐものと云ふべし、此は彼に優ると一二等、何んとなれば、其の幾分の實社界を寫し、現今の魍魎を、反映し、照映し、捉影し、幻影する所ろありと見ゆれば也。但だ其露形何如に至つては、今の政治界の爲にも、亦一つの問題也。

四。歷史家としての山陽の位置は、朝比奈知泉氏の論文となす、前年不染廬主人が半ば論述したるものを大成し、穿鑿明徹、簡潔にして能く盡す。

槪するに、此度の附錄は、何にとなく例の如く引立たざりしが、一讀し去れば、實味は從前のに倍し、價値甚はだ少なしとせず。

巴波川、新桃花扇　撫象子

新著百種の號外にして、紅葉山人が新作二篇を載す、共に是れ驚ろき入りたる趣向にして、春水を今の世に引出したると違ふべくもあらず、小說と云ふものにして若し斯の如く成りもて行かば、良家の父兄は一切其子女に小說を手にするとを得さしめざること善けれ。



隨感

○英雄の起る所地形好し（上）

雲峯生

月移り、日改まり、茲に新歳を迎ふ、一日閑に乘して上毛の地に遊びぬ、歸途高崎に至り、停車場裏の棧橋に立ち、躊躇低回去る能はざるもの久しかりき、蓋し此地理四方平坦、遠望最も佳なればなり、近邇の山峯原野未だ一點の白色なく、翠色黛容舊に由て依然たり、半峯白雲に隱れ、白雲靄々たるものは只越の高ねと、赤城の連山のみ、淺間山巓一抹の烟、今尙縷々として立のぼる、碓川流れは淸く、英雄至潔の心に譬へつべし、嗚呼上毛の地山高く、水明かに、地廣濶たり、顧望すれば西山東流凡て是英雄の跡あり、南村北落古來幾多の豪傑を出せり、豈多少の感なしとせんや、嗚呼なしとせんや。

徐子孟子に云つて曰く「仲尼亟水を稱して曰く水なる哉水なる哉何ぞ水に取れや」と、孟子之に答へて曰く源泉混々として晝夜を舍てず、科に盈ち而して後進みて四海にいたる、本あるもの是の如し、是を之れ取れるのみ」と、若夫れ仲尼は水に由て德を養ひしとせば人、山河の形勢により、地理の狀態に從つて多少の英氣勇志を養ひ得るは理の睹易きもの〻み、雲井龍雄が昔し大舜を送るの詩中に句あり、「駿之山兮參之水、英雄起處地形好」と、至言と謂つべし。

余屢内地を漫遊し、上毛の地に到る每に未だ嘗て「英雄起處地形好」きを感ぜずんばあらず、天下滔々賊軍に靡くの時、「義兵一擧長蛇を戮す」るの大功を建、「千里の外に潮勢を退く」るの威力を示せし者は誰ぞや、王威衰頽亦振ふなきに至るや、悲憤慷慨、狂と呼ばれ、痴と稱せらる〻も顧みる所なく、義臣忠士の龜鑑となり、後世人をして風を望んで奮起せしむる者は誰ぞや、人は云ふ、新田公佳人に對して別離を惜み、延引遂に大事を失す、豈呼んで眞の英雄と云ふ可けんやと、余以爲らく大事の去る誠に時機の然らしむる所のみ、新田公の罪に非ず、其別離を惜む所、眞に是新田公の英傑たる所以なり、拔山倒海の豪傑も數行の淚、暗燈影裏に濺るの時、虞や虞や汝を如何せんと愁嘆せしに非ずや、佳人熱淚あり、英雄情なきを得んや、此を以て知、新田公は眞の豪傑たるに恥づる處なきを、高山氏の如きに至つては素より忠節双びなく、皇國多く出さ〻るの士なるは人の知る所亦以て其偉人たるを證するに足る。

笑ひ草

口と心ー子供正直

さよ子

いつはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉嬉しからまし」とは、昔し誰やらむが、詠み出たる和歌なるが、扨も微妙じく人情を、穿ちたる言といふべし、或人は之れを「僞りのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉たふとからまし」と直して、今の世の、口賢しげにいひ罵る人々の、行ひは左あらぬを、批評しぬ、なる程是も亦、いと意味ある詞なりかし。

何れの國の事にや、近頃豫算委員とかいへるものありて、其が中には、つね〴〵潔き言をのみ口にしつ、幾年か、自由、民權なんどゝ唱へて、政治の改良を計りたるほどの人も、をさ〳〵ありと聞へつるに、如何なる風の吹廻しにや、其殿達は、或る邊りより、鼻薬とか、黄金水とかいへるものを貰ひ受けて、萬づ其頼み人の意をのみ嚮へて、其が勝手能きやうに、編みなしつ、立派なる詞の裏に穢き心ををしかくし、何喰はぬ顔にて、其豫算表とかいへるものを差出したりとぞ、專らに噂すなる。妾は其事の眞實なるか、空事なるかは知るよしなけれど、果して然あらんには、是も亦僞ある人々にて余り尊ふとからぬ心ばえにこそと思ひ遣らるぞ、うたてけれ。今一つは、這も亦、多くの御國人の中に於て、撰りに撰られたる人なりとかいへるが、其人己が身は常々、都の内に、住み居しにも拘はらず、心つくしの果より、辛ふじて推擧されたればとて、其處よりはる〴〵都へ登るほどの、路の費を官府より請ひ受けしとかいふなる、思ふに這も亦、平素は左こそ政費節減をも唱へ民力休養をも説きいでつる、あわれ一かどの大將株にてありしならむに、折にふれてかく心の底の、詞には似もやらぬふし見出さるゝぞ、かへす〴〵も口惜しき事になむ。左ればお客に向つてお世辭を述べながら、蔭に箒を建てさする奥様、表面には念佛三昧に日を暮らすと見せて、心は始終臺所の隅にさまよひ、嫁の落度を見出す姑なんどの多きは、素より、怪しうはあらねど、かゝる類ひのみ殖えもてゆかば果ては如何の世となるやらむ、思ひ遣るだに心ろ苦るし。其が中かに在りて、世の塵りにも汚がされず、濁りにも染まで、生まれたるまゝの、潔白なる心ろを持

ち、思ひのまゝを、率直に、口にいひ出るものは、いとけなき、稚な子のみになんあなる。左れば昔しより子供正直とぞ諺にもいふなり、左ほど大人には正直なるもの稀なるにや。

此頃の事なり、或る家に、五人六人の客團座して、さま〴〵の事語り續けゝるが中に、やがて一人の年層なる男子のいひ出けるやう、其許達は何と思し玉ふぞ、昔より心は胸にこそあれといひ傳へつるに、近頃は、心は頭腦にありといふなる、左れど先づ思ひても見玉へよ、憂はしき事、歎かはしき事あんど出來る時、頭よりも、胸にそは先づうち塞がるなる、是を以て見れば強ちに、心は頭腦にのみありともいはれぬやに思はる、左はあらずやと、膝を進めて說き出しに、折ふし、八ツ許りの男の子、傍に聞居けるが、いぶかしげに其男の顏を見て、

「叔父さん、あなたは、心のある所を知らないの、私いは能ウく知ッてるの！、叔父さんの心は、屹度口の裏の方にあるのよ、デモ此間お母さんが、アノ方は實に、口と心と裏表だからッてお父さんに、話してたんだもの……………

といひ出けるにぞ、一坐背に汗しけるとなむ。

問答

可愛子

問。私は和歌を學びたひと思つて居るのですが、貴社に事務所があるとかいふ、案山子舍は、如何なる組織ですか、又入舍するには如何ある手續が入りますか、委しくお答を願ひます。（谷田滿雄、敷嶋道子）

答。案山子舍は、都合があつて、遠く離れた人を入れません、しかも歌にたゞ女學雜誌社と、明治女學校だけの舍です、御執心ならば、同舍の人同樣に、池袋さんに直して貰ふ事が出來ます、即ち束修金五十錢と、月謝金三十錢出せば、一週間に六首、一ヶ月に廿四首、添削して貰へます、池袋さんの住所は、京都上京區烏丸通一條上ルであります。

問。貸家の札を「かしや」と斜めに貼り付けあるは如何の儀でありますか。

答。眞直に貼ると、外の廣告と紛らはしくなるから、斜めに貼るのでせう、又正しく、いつまでも貸家の札を貼り置くとは、家主にとりても、快よくなき故、早く空屋を塞げたく思ふ所から、假りに暫くの間空き屋と思ふ心から、斜めに貼るのでせう、家主の心持になつて見ると、多分さうだらうと思ひます。

時事

○元旦の禮

禮は和を以て尊としとあす、徒づらに虛文に流るゝときは、破壞の反動なくんばあらず、近年元旦の禮を疎んずるもの益々多きは、素と快ち好からぬ現象なりとは云へ、亦致し方なき成行とこそ言ふべけれ。願はくは速かに平然に復し、禮は禮として人々和らぎの爲めに重んぜんことを。

○異樣の廣告文

品川彌二郎君は激する所ろあるなるべし、去年の正月も一種異樣の廣告を出されけるが、今年は二十五圓を大日本農會に寄附し虛禮を省くと云へり、自から廣告するの處置左程有がたきものにあらず。山尾庸三君亦た同じき旨に由るとや、金二十圓を盲啞學校に寄附したり。扨て不快尤とも太甚しきは、かゝる廣告と比隣相列びて、女郎屋の亭主が、年來の愛顧を謝し、更に舊に仍るの贔負を祈るとの廣告を堂々掲載せしめたるの一事是也。

○文學論

世上の文學論いよ〳〵微妙に入る、將に毫を分ち、厘を剖たんとす。惜しむらくは空論久しく時を得て、大傑作の出づる甚はだ遲きことを。

○才子病

才子多くは短命、佳人半ばは夭死す、其患ひ大率ね肺にあらざるはなし。今やコッホ氏すでに其根治療法を發見し、新法近く渡來せんとす、感謝すべし才子病今后漸次に其痕を絶つに至らんとす。

○群馬縣會

群馬縣會は、偉男子多しと云ふべき哉。縣知事に堂々として辭職を勸告し、中止解散の命を受く、超る數日招集せられて再たび會議を開き又々辭職を勸告し、又々中止解散の命を受けたり。而して其の辭職を勸告するの理由大率ね二つ、知事が全縣下の輿論たる公娼全廢を決行せざると其第一となす。あゝ群馬縣下に偉丈夫多し、信じて之を行ふ鬼神をも避けず、況んや兩二千年俸の人をや。

○保護大會社

預算委員、何すれぞ先づ保護大會社の一項に直入せざる。吾人

○新年早々泣かんと欲す　川合信水

芳原の遊廓は、新年に及んで俄然増加したりといへり、洲崎の遊廓も、昨年中の不景氣なるに引替へ、新年一日の遊客は、無慮三千二百有餘人なりしと聞けり、年新たにして人心蘇るが如し、廢娼論の爲めに負傷し、衰弱したる姦淫罪も、忽然として今は人の心中に蘇生せんとす、嗚呼吾人は新年早々泣かんと欲す、義に勇み、罪に怒るの兄弟よ、正を愛し、悪に泣くの姉妹よ、毫末も油斷すると勿れ、絲厘も安心すると勿れ。

○卑屈なる男　同

國會議員の許へ、時々風躰の變りたる男尋ね行き、或は五圓呉れろと云ひ、或は一圓呉れろと云ひ、宿料なき故二十五錢貸し給へと云ひ、今夜の飯代として五錢程都合し給へと云ひ、弱き人には請求する樣に、強き人には泣き訴ふる樣に、兎角して金錢を貰ふものありと、男一匹さても卑屈なると哉、斯の如きの男、跡を絶つに至らずんば、此愛すべき日本の將來を奈何せん。

○殖民論盛んに起らんとす　撫

本年の天機豫報には、矯風大に起るべしと、斷言せしが、尚ほ本年に於て、盛んならんとするものは、殖民論なるべし、貧民論なるべし、即ち國民新聞は左の如く掲げたり、

殖民會社　星亨氏は今度標題の如き會を設立する計畫中なる由其目的は我國人中風強の壯士を亞米利加、加奈陀、墺地利等の諸國に移住せしめ先づ土地の開墾を第一着手となしそれより數多の事業を起して遠き万里の外に不羈獨立の日本村を立て將來我が人民の繁殖するも差支へなき樣にするに在りと又此事に就ては板垣伯も大に贊成して共に考案中なりと。

其他種々なる、報道の模樣に依て見るも、何となく今年の氣運は、空論止んで實際的となり、空拳を振ふを止めて、算盤を取るか、鍬を握るか、詩を作るよりも、田を作るの上策に出でんとするものゝ如し。而して貧民問題も亦接で起らん、此際仁者義人の蹶起を祈る。

○貸金慈善會

支那江蘇揚州府にては從來因利局と呼ぶ貸金慈善會ありて無利子にて貧民に相當の商工資本を貸與し日割返納の法を立て小民飢寒の苦を救ふの效甚た多きを得たりしが今同北京にては地方紳士の計畫にて銀五千兩を醵出し該局の章程に倣ひ借錢局と名くる慈善貸金所を右安門、彰義門阜成門宣武門等に設置し京錢十千凡そ五圓に相以上二十千以下を貸與し利息を取らず保證人を立て該所に申込む者あるとき當すは直に貸與し日數に分算清還せしむる旨已に全城内に廣告したり該局は追て此法を城外村落にも擴充施行する計畫なりと云ふ（十二月十九日上海字林滬報）

○近頃の政界

近頃の政界は變化餘まりに激烈なり、猫の眼の如く刻々に廻轉する變化は、吾黨の注目すべき價値もなし。死者をして死者を葬むらしめよ。吾等はいざ根蔕に培かはん。

○平民的新聞

政派政黨の爲にのみ新聞帋の出で來るは、何程出で來りても左程嬉しきとにあらず。曩に大井憲太郎氏が「あづま新聞」を發兌し、近頃一木齋太郎氏が「文明の花實」を新刊せらるゝは、主旨悉とく平民の友とあるにありけり。是れ尤とも喜こぶべきの事とす。

○賄賂を取りたる議員あり

衆議院議員にして、雲上より十七万圓、某會社より五万圓の賄賂を貰ひ受たる者ありと風聞す。何等の大怪事ぞ。政府は之を馬耳東風に附すとある可らず、受賄嫌疑の人之に默々たるとある可らず、衆議院議員の全躰亦決して輕々等閑視するとある可らず。彼等は皆な之を棄て置き難き責任あり、若し棄置きて何とも言ふと能わずんば、吾等は遂に彼の風聞を確信せざるを得ず。彼の風聞を確信するもの安くんぞ彼等を此儘に放擲せんや。

寄書

女學雜誌記者ハ明治の女學生をして尼とならしめんとするか

半風子

女學雜誌第二百三十九號雜錄中ニ當今女學生の覺悟如何の題ニて清水豐女史が女學生に向ひ懇々警誡したるは實ニ結婚せんとする男女に向ひて有功の良藥とも謂ふべし殊に文中自己の意思に適したる良人、改良の望ある家族に非るよりは、決して歸がじとの決心なかるべからずとは予の賛成する所にして獨女子のみならず男子も女子を娶るに此決意を要する也又近頃予の友二三聟新に結婚せんとするものあり一に狂の如く、痴の如く婚儀をのみ急げり、彼等は決して學生として充分の業を卒へたるにも非ず又今后二三年間を學窓に送るべき餘裕なきにもあらず然るに云々此意も亦予は女史と同感にして十餘年前より女生に向ひて諫る所たり少しく精神ある男子は學業を半途にして婚儀を急ぐが如き女子を娶る事を耻づべし男子も亦然り未曾通課を卒へず齡二十五歳に至らず勿論將來處世の目的も立ずして早婚を欲するが如きは人の賤む所たり然れども良藥分量を過す時は又人を害す女史の論此弊なしとするか否、は世の家庭中最困難の點を網羅集合して遺さず初學淺見の女生をして結婚の聲を聞くや忽戰慄阿鼻地獄の畫を見るが如き感あらしむ慨歎の説明と謂はざるを得んや天下の女學生心を公平にして思考せよ明治の今日に於て一般の家庭豈悉く然らんや女史は京都の人也と聞く京都は世人の思ふ如く最舊習頑固の家庭多からん或は女史の述るが如き事情なしとせざるべし然れども斯る家庭は初より明治開進の女學生の如きを娶る事を敢て爲さゞる也之を娶るは學校教員か基督教信者の家にして男女同權とか自由とか又歐米の風習を見聞して婦人を貴ぶの精神自然に保存し舅姑と雖之を心得たるべし何ぞ必しも女史の述るが如き苛酷なる壓制を學識ある今日の新婦に施さんや却て自ら舊代に生れ學識なきを耻ぢて大に讓る者あらん誠に思へ學識ある女生を好んで娶らせんと渴望する其男子にして豈天保代を固守するが如き痴呆ならんや若し其父母頑固なる時は初より夫婦は別居して其愛する新婦を舅姑の奴隸とせざる固より論を俟たるざる也又女子に於ても初め結婚の示談に臨み能く其一家及男子の事情を探索して而して後夫婦たらば何ぞ此の如き地獄の釜中に落ることあらん然れども斯る極端の景狀を掲げて明治の女生に示す時は折角養成したる智德を結婚後に實行せんと欲す

る有爲の女子も之が爲に結婚を躊躇し或は絶念する者あらん又實際結婚して夫婦和合し所謂ハッピー、ホームを作り文明の模範を示し相助けて社會の益を爲す事あらんと皆之が爲に方向を變する事ありとせば果して女子の天性が是れ十人の難を救はんとして千人の幸福を殺す處の過量の劇藥にはあらざるか予は之が解毒を與へて天下女生の戰慄を療せんと欲せしも多忙寸暇を得ずして以て今日に至りしに又同第二百四十四號言行と云へる部內に內助と謂へる短簡なる例文を掲げたるを視て益女生の偏見に陷らん事を恐れ多忙中筆を執て論辨するに至れり蓋人の思想は動もすれば極端に向ふ者也狹隘に陷る者也女學雜誌記者は外國男女の利己主義の例を掲けて天下の女生を誡められたるべし然るに其結果は一兩人の害を防がんとして千万の女生の意地を惡くす人情千差万別の世薄情なる男女の緣談も誠實有益なる男女の婚事も活眼を以て一も區別する事なく悉く此死したる論理の棍棒を以て一言の下に叩き斃すが如き粗暴殘酷の例にあらざるか熟世間の實際に就て觀るべし世人結婚するに臨み男女各內助の事を思はざるか結婚の後果して內助を爲さしめざるか封建代の大名にあらざるよりは必內助を爲さしめん否國王と雖其例あり齊王は瘤婦の賢を視て之を娶り政事を助けしめ能く國を治めたり內助果して惡しきか予は解する能はず然れども此如き單簡にして一理あるが如く見ゆる語は能く世人の腦中に止まる者也之が爲に明治の女學生をして一の惑に落し自然求婚者を疑ひ結婚を逡巡するに至らしめん即ち天下女學生の一生の幸福及ひ淳良なる求婚者の志望を團子刺に刺殺す一鎗亦恐るべき也曩に淸水女史の論あり今亦此諷諫あり思ふに女學雜誌記者は堂々たる天下の女學生をして暗々裡に厭世宗否厭婚宗に引入れんとする者の如し果して然る時は教育したる智德も施すの區域甚狹く天下に賢母を作り英傑を產育するは何れの日に望むべきや女生悉く學校教員と爲りて白髮に至るべきか學校教員は男子にても可也子女を產育するは男子の能はざる所たり故に予は言ふ明治の女學生よアサロラレー女の如く水臭小理屈を吐く事なく斯る高慢なる思想を抱き世人より生意氣の評を受る事なく內助卽ち夫婦相助けて社會を益する事を思ふべし若し他日社會を益すべしと信ずる男子あらば義俠心を以て或は結婚し之を助くべし又男子も女子の精神あるを視ば之を娶て其志を遂けしむべし是に於て始て夫婦の眞情は顯はるゝ也女學雜誌記者は何故に斯る外國女の水臭き語を掲けて日本婦人の謙德を害するや然れども此社には予の敬慕信愛する巖本先生あり而して予は淺識短才也若し言ふ處誤見あらば謹て教諭を受けん予常に多忙文を飾るに遑あらず亂筆に任せて赤心を吐露するのみ。

新誌

可愛子

●日本　は一月五日、六日の紙上に跨りて、誠心と題し、天下強きものは誠に如くはなし、苟くも一の誠心にして、存せざれば小事と雖も爲す能はず、況んや大事をや、誠なき者は天下の至弱なり、吾輩が日本人民の爲めに望む所は、政府及び議會が、互に誠心を以て相和し、又誠心を以て相爭はんとにありと論ぜり、其文滔々數千言、生氣躍勃紙面に溢る、讀者徒らに日本を以て奇矯なりとして棄る勿れ、此奇矯の男兒をして、奇矯の文を作らしむるもの、抑も誰れの罪ぞ。

●國民新聞　は一月五日の紙上に於て、一層關心の事と題し、說く勿れ山縣內閣は、果して豫算委員硬派の意見を嘉納するや否やと、吾人は此よりも倘一層關心すべき、切通緊要の問題あるなり、何ぞや、議會は果して硬派委員の意見を通過せしむるや否やと、吾人は實に掛念に堪へぬなりと、それより議會內に、硬派の存外少なきとを擧げて論じ夫れ事は企るを貴ばずして、成就するを尊ぶ、未だ知らず硬派の議員諸君は、如何なる關算あるか、之を聞かんとを熱望すと論ぜり、動もすれば昏睡し、或は突飛し、謹慎靜慮を欠くの人にとりて、此文も亦一の氣附藥なりといふべし。

●國會　は琉球問題と題し、一月五日の紙上に於て、彼の新任の支那公使、李經芳氏が帶び來れる使命の一は、確かに琉球問題たりといふと、啻に閭巷の風說に止まらざるなりと、其理由を述べ、更に進んで、琉球は群島散點、土地褊狹なりと雖も、要港泊津の艦隊を繫ぐべき者、甚だ多々なり、一旦此要地にして敵地に入らば其利實得失、國勢の大躰に關係するを尠少にあらず、故に斷々として之を他人の手に付すべからざるは明らけし、而して今ま支那との交渉問題に逢ふ、李經芳公使果して此議を提出せば、我れ將た如何に之を處せんか、他なし琉球の我日本に於ける關係を明斷にして、學術上、歷史上、正確に我藩屬たるを示し、又彼をして由りて入るべきの口實なからしむるに如くはなしと、學術の上より、又歷史の上より、一々之を論じ、之を確かめ、終りに臨んで、一は支那外交官の伎倆に注意を要すべし、二は東方問題の遠慮なかるべからずと論じたり、內國黨派の爭に汲々として、外國交渉の事に無頓着なるもの、宜しく注意して見るべし。

●基督教新聞　は新年の立志を題し、說て曰く、人は死し、世は衰ふ、然れども獨り替はらざるの神あり、又獨一の救主あり、若し我をして我一生を私するの慾を除つて、之を神に犧牲し、其大命に從ひ、其默佑を隱き、其祝福を樂み、其事業を贊くるを以て生涯の大志となさば、豈我心は時々刻々新年ならざらんや、塵世の悲憂何ぞ復た我衷情の樂境を侵すを得んやと、亦有益の文字、徒らに無常を悲む者、何ぞ來て之を見ざる。

通信

可愛子編

●高知縣通信　●尋常中學校敎師　是まで尋常中學校はパイヨー夫人を月俸八十圓にて英語敎師に雇ひありしが此度尋常中學及び海南學校の雇ふるパイヨー氏を月俸百五十圓にて兩校に雇ふとこなり即ち海南學校より八十五圓中學校より六十五圓出すとゝなり同氏は兩校敎授兼持ちとなり又パイヨー夫人は手當金十圓を貰ふとこなりぬ。

○桑名淳氏　前々號に同氏を以て英和女學校和漢學敎授とせしは誤にて同氏は和學專門の敎師にして頗る此道に長けたる人なりと又同校は生徒に和歌を學ばしむる由。

●新潟縣高田通信　●高陽女學舍　高田なる高陽女學舍は本月より私立高陽女學校と改稱する赴にて其出願等の事につき目下其發起たる各宗寺院より一名宛の惣代を撰擧中なる由。

○女工場　高城村字四會所なる加藤女工塲は久しく休業の處今回森山信一氏が引受くるとこなり本月十日比より開始する由。

○又　此度竹越竹雄氏の企にて高田女工塲を新設し目下生徒募集中なり現在生徒の數別科三百名餘本科八十名餘ありてかよわき婦女子は此寒天をも厭はず孜々として縫繡に奮勉せりとぞ。

○又々　信州上田銀行の支配某氏は當地に製絲塲を設けんと目下計畫中なり。

●福島縣通信　●廢娼建議書議題となれり　昨十二月二十六日廢娼建議書は福島縣會の議題となれり本年の開期には何れ可とか非とか決すべし。

●靑森縣通信　●盛岡の靑年會　は是まで餘り振はざりしが近頃より或る靑年の發起にて廢娼運動に盡力し居れり。

女報

可愛子編

●二位局の新年宴會　中山二位局の方は、新年一日、宮城並に靑山御所へ奉仕の女官方を、靑山南町一丁目の官舍に招待し、新年宴會を開き、餘興として手踊りの催しありたりといふ。

●四日市日曜學校幼兒の美擧　吾人は今ま茲にいと美くしき、喜ばしき一報を掲げん、時は昨年十二月クリスマスの日にして、處は三重縣四日市なり、同市日曜學校の幼兒の數は僅かに七八名なるも、其志愛らしくも、殊勝にて、日頃其好める菓子、果物等を買ふとをさへ耐へ忍び、一厘三厘づゝ母より貰ひたる錢を溜め置き、或は父母の用事を足して、足代として貰へる一厘二厘を溜め置き、安息日の至るを待ちて、敎師の許に預け置きぬ、塵も積れは山となる、僅かの幼兒が集めし、僅かの錢も三月より十二月までに至りて、五圓餘りの金となりたりとか、幼兒等は其金の內を以て、紙鳶、羽子板など、種々の品を買ひもとめ、當港袋町とて、いと貧しき漁民の住みたる所に行き、手に〳〵持ちたる品物を、貧民の子女に分け與へしに、彼の子女は未だ曾て紙鳶、羽子板など、持ちしことなきものと見へ、其喜ぶを限りなく、早く父に見せなん、母に見せばやとて、さながら狂せるばかりなりしと、與へたる日曜學校の幼兒は、其樣を見て、與へられたる子女より　、更に愉快を感じけん、莞爾として彼の子女に向ひ「またあげますよ」といひつゝ、いそ〳〵として歸りたりと、嗚呼愛らしき幼兒よ、爾等が當日の美擧は、在天の父上を喜ばしめたるを、果して幾何ぞ、吾人は記し了て、覺へず感喜の涙に咽びぬ、世間滔々浮薄の人よ、讀んで而して猛省する所あれ。

●明治女學校の職業科　はいよ〳〵、本月十二日より始業するといふ。

●京都看病婦學校　基督敎主義の看病婦を養成せんとて、數年前に設立せる、京都看病婦學校は、現今生徒の數、一年生十一名、二年生十一名にして、東西十餘州より來り集れり。

●女子奬勵會の舞踏　女子奬勵會に於ては、本月四日、舞踏をなしたりといふ、奬勵會舞踏を奬勵す。

●景山英女　大坂事件以來、名を擧げたる景山英子は、此度女子の實業を授くる學校を起し、目下通學百名、寄宿生五十名を限り募集中の由。

●山縣つる子　は是迄東京中(牛込)昇天(京橋)聖十字(芝)聖安得烈の諸敎會中にありて、熱心婦女の傳道に從事せられたりしが、昨年十二月以來、千葉縣下下總田敎會に赴任せられたりとぞ。

●女執事　豈獨り東京のみならんや、讃州高松の組合敎會にては、野中ちよ、兒玉はつ二氏、執事に當撰せり。

●沖繩縣の婦女　は內地の婦女の如く、常に化粧をするとなき故、內地より行きし婦人の、化粧三昧に日を暮すを見て、彼等は笑ひ居る由、又中以上の家の婦人は、常に人と面會するを好まず、若し面會を乞ふものあるときは、白き禮服の如きものを着て對面するといふ、宴會などの時、婦人を其席に招き來りし時、主人より唱歌を望むときは、少しも恥る色なく、列坐の婦人一樣に聲を揃へて唱へ出すは一奇風なり。

●廢娼建議空しく立消となる　山梨廢娼義會よりして、昨年同縣會に提出したる、廢娼の建議は、縣會の都合によりて、縣廳より下附せられたる議案の後と廻しとなりしが、其後縣會には常置委員に對する信任投票の件起り、種々の悶着ありて、常置委員は總辭職、引續て議長、副議長の辭職となり、爲めに議事も手間取れ、十二月二十八日、最終の日、他の議事を終へ、一休の後、廢娼建議にうつらんと

せしに、休みの中議員はいつか歸り去り、殘る者僅かに十二三名、據なくして閉會し、幾人の涙痕滴々たる廢娼建議空しく立消さなる。

●京都府有志者の廢娼請願　京都府の基督敎信者にして、廢娼熱心家ある人見慶太郎氏は、今回信徒三千餘名の代表者さして、上下兩院に公娼廢止の請願をなさんさて、委員を定めて、調印募集中なれば、晩くも本月下旬に上京し、差出す都合ありさいふ。

●存娼運動　廢娼論の盛なる反動さして、存娼論は起りたり、聞く所によれば、洲崎の醜業者は、某新聞記者さ相談して、存娼運動をなすさか、記者か、奇者か、何ぞ德に恥ぢざる。

●新聞紙の雜報、藝者の披露　思ひきや今又「あづま新聞」の雜報欄内に藝者の披露あらんさは、日本道德の程度知るべし。

●都新聞の附錄、天女の像　は、府下幾多の新聞の元旦附錄中、最もよく出來たり、天女の像、淸麗にして神高し、其月、其雲、其家、孰れも配合宜きを見る。

●根本正氏　を女子高等師範學校の敎諭なりさ記せしは、誤りなれば、爰に正誤す。

週報

●官令　四日勅令を以て在外國難民貸與金一時繰替支辨の件を裁可公布せらる●同日同令を以て海軍高等武官任用條例中追加の件を裁可せらる。

●宮廷　一日皇帝皇后兩陛下宮中鳳凰の間に於て御皇族及び宮內省高等官の拜賀を受けさせらる●同日皇太子嘉仁親王殿下參內あらせらる●三日元始祭天皇陛下親臨せらる。

●政治　一日豫算案に關して內閣會議を開く●四日政事始●六日國民自由黨の演說會あり。

●敎育　神田錦町の國民英學會はイーストレーキ氏さ關係を絕ち益々規模を擴張するさいふ。イーストレーキ氏は別に日本英學院を組織し生徒を募集せり。

●叢報　一日在京の議員議院に於て天皇陛下の萬歲を祝す●二日兩院議員參內す●三日上野東照宮神殿に於て御諡初式を執行す。

品名	一月七日
白米（一円ニ付）	
一等米	一斗〇升二合
二等米	一〇四
三等米	一〇八
四等米	一一五
五等米	一二一
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗五升七合
伊勢米	一三七
美濃米	一五一
尾張米	一五二
肥後米	一四九
一志米	一四四
關取米	一四一
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗四升五合
上州小麥	一四五
相州同	一六二
下總同	一八〇
常州同	一八五
梅澤大豆	二一八
青柳大豆	二〇六
吟小豆	一五五
白胡麻	一二〇
黒胡麻	一五五
鹽（一円ニ付）	
赤穗	二俵七分〇厘
大鹽	二七八
本齋	四六五
新齋	四九七
醬油（一円ニ付）	
最上	樽七分九厘
極上	九三
上物	一三五
中物	一九〇
下物	二三〇

品名	一月七日
木綿織物（一反ニ付）	
佐織紺織	六十三錢〇厘
納戸織	四八〇
同茶縞	五〇〇
同布團縞	四八〇
生機縞	三一〇
美濃黄八反	二九〇
大和黄八丈	二五〇
とび八丈	二二五
美濃双子	五〇〇
物産縞	六五〇
糸入愛國縞	九八〇
笠井糸入縞	一、〇五〇
小巾紺縫絞	二九〇
同麻ノ葉絞	四〇〇
同鹿子入	四五〇
同養老絞	三一〇
京薄花色	二六〇
和糸紅花染	二六〇
大丸唐紅花	二二五
長尺紺縫しぼ	五〇〇
眞綿（一個ニ付）	
飛無銘	一二〇円、〇〇
並無銘	一〇五、〇〇
上入金	一一五、〇〇
並入金	一一〇、〇〇
炭（一円ニ付）	
伊豆上物	四俵五〇
同次物	四八〇
同下物	五五〇
淺上	三七〇
同次	四三〇
新宮丸備上	二三〇
同角備上	二八〇
下總松堅木	九八〇
同切炭	九〇〇

品名	一月七日
花色絹糸好	
生七十匁付	四円、〇〇
同八十匁付	四、四五
同九十匁付	四、八五
同百匁付	五、三五
同小節絹	
生八十匁付	三円、二〇
同本秩父絹付	
生百四十匁	四円、八〇
六丈絹猩々紅	
五十目立並	五円、八〇
同別仕入	六、二〇
濱縮緬（百目ニ付）	
大巾上馴	五円、一〇
小巾百廿目立上々	五、五〇
同下	五、〇〇
毛糸（百斤ニ付）	
鶴判上	一〇〇円、〇〇
同染分	一〇〇、〇〇
同中細	一一五、〇〇
同極細	一一五、〇〇
靴下用極上	一二〇、〇〇
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀頭	二円、四五
同大頭	一、九五
同小頭	一、六五
狹山稀頭	一、七五
同大頭	一、四二
同中頭	一、二七
同中茶	一、一〇
味噌（一円ニ付）	
上赤	六貫、七〇〇匁
中白	六、九〇〇
上赤	五、三〇〇
紅白	五、〇〇〇
相白	六、七〇〇

女學生

毎月一回第八號 一冊金六錢

編輯人 星野愼之輔

本校ハ本月十二日開校寄宿通學共入學ヲ許ス望ミノ諸姉ハ來校セヨ郵劵二錢ヲ送ラバ規則書ヲ呈ス

東京市芝區三田功運町三十番地

私立 **普連土女學校**

聽訟吾猶人也必也使無訟乎

法律財政經濟學得業士佛學會員**高木益太郎**ハ曩ニ東京法學校卒業生中特ニ**帝國大學總長**ノ撰抜ヲ蒙リ**法科大學**ニ於テ法律全科監督試驗ヲ受ケ及第シ續テ**判事試驗**ニ及第セルモ所感アリテ**高等官**ニ就クノ念ヲ絶チ更ニ代言職ニ從事センヿヲ志シ爾來猶ホ政治法律ノ學ヲ修メ丁年ノ至ルヲ俟チタリ然ルニ今般**代言試驗**ニ及第シタルヲ以テ敢テ自ラ揣ラス從來ノ住宅日本橋區本銀町四丁目九番地ニ於テ内外訴訟鑑定和解代言辯護法律書類起草飜譯等ノ事務ヲ取扱候事

○代言人高木益太郎法律事務公告

代言ノ職ハ濟世ノ仁術也故ニ當法律事務所ハ依賴事件ノ大小ニ關セス丁寧深切ニ取扱ヒ可成的報酬ヲ廉ニシ依賴者ノ望ヲ滿足セシメ特ニ極貧者幼者老衰者盲人瘋癲者等ノ爲メ**仁惠**法律事務ヲ取扱フ可シ當法律事務所第一ノ目的ハ平素取引ノ相談ヲ受ケ豫メ紛爭ヲ防禦センヿヲ務ムルニアリマタ、一旦訴訟起リタル事件ト雖モ苟モ和解ノ見込アルモノハ當事者間ノ情誼回復ニ盡力スヘク若シ和解ノ調ハサル片ハ法廷ニ起テ權利ノ護衛兵トナリ誠實且熱心ニ依賴者ノ利益ヲ保護シ代言人タルノ本分ヲ盡サンヿヲ誓フ

●女學生募集廣告

學期試驗ヲ終リ來ル一月八日第二期授業ヲ始ム今般米國人ゲップ女史來着敎頭オルドリチ氏ヲ助ケ英語佛語獨逸語音樂ヲ敎ヘ和漢學ハ勿論裁縫編物茶湯活花畫學等女子ニ必用ノ學科ヲ授ク又二三科目以上ノ撰修ヲ許ス寄宿舍ハ適當ノ日本婦人之ヲ管理ス規則書望ノ者ハ郵劵二錢ヲ送レ

麹町區上六番町十七番地

開成女學館

加減順氣散

婦人血の道子宮より發る的痛男女四季感冒頭痛其他は包書に委し

定價四錢五厘

振出しぐすり

本家

東京日本橋區通一丁目

須原屋 **北畠茂兵衛**

定價			
一冊	六錢	郵税五厘	(但府内無郵税)
十一冊	五拾八錢	郵税五厘	(同前)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

東京市麴町區下六番町六番地

發行所 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

私立 **普連土女學校**

本校は本月十二日開校寄宿通學共入學ヲ許ス望ミノ諸姉ハ來校セヨ郵劵二錢ヲ送ラバ規則書ヲ呈ス

東京市芝區三田功運町三十番地

聽訟吾猶人也必也使無訟乎

法律財政經濟學得業士佛學會員**高木益太郎**ハ曩ニ東京法學校卒業生中特ニ**帝國大學總長**ノ撰拔ヲ蒙リ**法科大學**ニ於テ法律全科監督試驗ヲ受ケ及第シ續テ**判事試驗**ニ及第セルモ所感アリテ**高等官**ニ就クノ念ヲ絶チ更ニ代言職ニ從事センコヲ志シ爾來猶ホ政治法律ノ學ヲ修メ丁年ノ至ルヲ俟チタリ然ルニ今般**代言試驗**ニ及第シタルヲ以テ敢テ自ラ揣ラス從來ノ住宅日本橋區本銀町四丁目九番地ニ於テ内外訴訟鑑定和解代言辯護法律書類起草飜譯等ノ事務ヲ取扱候事

○代言人高木益太郎法律事務公告

代言ノ職ハ濟世ノ仁術也故ニ當法律事務所ハ依賴事件ノ大小ニ關セス丁寧深切ニ取扱ヒ可成的報酬ヲ廉ニシ依賴者ノ望ヲ滿足セシメ特ニ極貧者幼者老衰者盲人瘋癲者等ノ爲メ**仁惠**法律事務ヲ取扱フ可シ

當法律事務所第一ノ目的ハ平素取引ノ相談ヲ受ケ豫メ紛爭ヲ防禦センコヲ務ムルニアリマタ、一旦訴訟起リタル事件ト雖モ苟モ和解ノ見込アルモノハ當事者間ノ情誼回復ニ盡力スヘク若シ和解ノ調ハサルトキハ法廷ニ起テ權利ノ護衛兵トナリ誠實且熱心ニ依賴者ノ利益ヲ保護シ代言人タルノ本分ヲ盡サンコヲ誓フ

●女學生募集廣告

學期試驗ヲ終リ來一月八日第二期授業ヲ始ム今般米國人ゲップ女史來着敎頭オルドリチ氏ヲ助ケ英語佛語獨逸語音樂ヲ敎へ和漢學ハ勿論裁縫編物茶湯活花畫學等女子ニ必用ノ學科ヲ授ク又二三科目以上ノ撰修ヲ許ス寄宿舍ハ適當ノ日本婦人之ヲ管理ス規則書望ノ者ハ郵劵二錢ヲ送レ

麹町區上六番町十七番地

開成女學館

加減順氣散

婦人血の道子宮より發る的痛男女四季感冒頭痛其他は包書に委し

定價四錢五厘

振出しぐすり

本家

東京日本橋區通一丁目

須原屋 **北畠茂兵衛**

定價			
一冊。	六錢	郵税。五厘	
十一冊。	五拾八錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は 壹圓五拾六錢	
一年分	貳圓六拾錢	府外は 貳圓八拾六錢	(同前)

發行所 東京市麹町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三